

第37回「全日本中学生水の作文コンクール」
入賞作文集

水について考える

主催 水循環政策本部・国土交通省・都道府県
後援 文部科学省・厚生労働省・農林水産省・経済産業
省・環境省・水の週間実行委員会・独立行政法人
水資源機構・全日本中学校長会

第37回 全日本中学生水の作文コンクール について

水は人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源であり、限りある資源でもあります。

「水の日」及び「水の週間」は、水の大切さや水資源開発の重要性に対する国民の関心を高め、理解を深めるため、昭和52年の閣議了解により政府が定めたものです。年間を通じて水の使用量が多く、水についての関心が高まる時期である8月の初日を「水の日」（8月1日）とし、この日を初日とする一週間（8月1日～7日）を「水の週間」として、水に関する様々な啓発行事を毎年実施しております。

この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和54年より「水の日」・「水の週間」行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいはご家族や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

昨年3月に水循環基本法が成立し、8月1日は法律で定められた「水の日」となりました。このことから、「全日本中学生水の作文コンクール」を政府全体の取組とするため、最優秀賞に内閣総理大臣賞を、優秀賞に関係省大臣賞を創設したところです。

全国（海外を含む）の中学生から16,432編（学校数345校）の応募があり、今回は自らの体験を通じ日常生活における水の貴重さを表現したもの、美しく豊かな水を未来へ受け継いでいくために水を大切にしていこうという気持ちがよく表現されたもの等がありました。このたび、入賞作文37編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校やご家庭において、「水」について考えるきっかけとしてご活用ください。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、またご多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚くお礼申し上げますとともに、ご協力いただきました文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、都道府県、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構及び全日本中学校長会等関係の方々に深く感謝申し上げます。

平成27年8月

国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部

「水の日」・「水の週間」について

「水の日」及び「水の週間」については、昭和52年5月の閣議了解を基にその行事等を実施して参りました。諸行事の実施により我が国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することを目的に、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の初日である8月1日を「水の日」、この日を初日とする一週間を「水の週間」としております。

「水の日」及び「水の週間」について

閣議了解
昭和52年5月31日

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

平成26年3月に水循環基本法が成立しました。本法律では、水が健全に循環し、そのもたらす恵沢を将来にわたり享受できるよう、水循環に関わる施策を包括的に進めていくことが不可欠であるとされました。また、同法第10条において、「水の日」が8月1日と規定され、国及び地方公共団体は水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならないとされています。

水循環基本法（平成二十六年法律第十六号）

（水の日）

第十条 国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水の日を設ける。

2 水の日は、八月一日とする。

3 国及び地方公共団体は、水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならない。

全日本中学生水の作文コンクールは、広く国民が水の重要性についての理解と関心を深めるための普及行事として、「水の日」・「水の週間」行事に位置付け実施しているものです。

目次

最優秀賞 (一編)

《内閣総理大臣賞》 かけがえのない「水」への思い

愛媛県 松山市立椿中学校 三年 天野 加奈子 2

優秀賞 (八編)

《厚生労働大臣賞》 努力の結晶

福島県 鏡石町立鏡石中学校 二年 柳沼 優吏 3

《農林水産大臣賞》 過去から未来へ

栃木県 佐野日本大学中等教育学校 一年 石川 未彩 4

《経済産業大臣賞》 美しい生命の水を守るために

徳島県 鳴門教育大学附属中学校 三年 山根 綾華 5

《国土交通大臣賞》 かけがえのない水

福島県 福島市立北信中学校 三年 遠藤 亮佑 6

《環境大臣賞》 四季の味がする水

福島県 福島大学附属中学校 三年 鈴木 康源 7

《水の週間実行委員会会長賞》 水の輝き、それは命の源

徳島県 鳴門教育大学附属中学校 三年 井村 華子 8

《独立行政法人水資源機構理事長賞》 滝沢ダムの一滴

埼玉県 秩父市立荒川中学校 三年 宮田 帆乃香 9

《全日本中学校長会会長賞》 先人たちが残した水の恵み

山梨県 北杜市立甲陵中学校 二年 小林 礼佳 10

《全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞》 私たちの水資源

徳島県 阿南市立那賀川中学校 三年 廣瀬 萌瑚 11

入選 (二十七編)

岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校 三年 佐藤 暢 12

宮城県 登米市立中田中学校 三年 渡邊 ちなみ 13

福島県 平田村立蓬田中学校 二年 上遠野 幸 14

千葉県 八千代松陰中学校 三年 加藤 咲希 15

神奈川県 洗足学園中学校 一年 三浦 碧美 16

富山県 高岡市立芳野中学校 二年 林 えり 17

富山県 高岡市立高陵中学校 二年 三邊 幸奈 18

山梨県 山梨大学教育人間科学部附属中学校 三年 小平 守莉 19

静岡県 静岡市立清水第八中学校 三年 飯田 祐大 20

静岡県 静岡市立蒲原中学校 一年 大津 亜矢香 21

愛知県 豊橋市立南部中学校 三年 仲川 晴斐 22

愛知県 常滑市立南陵中学校 三年 久野 美裕 23

滋賀県 滋賀県立河瀬中学校 三年 宇野 ひかり 24

京都府 京都学園中学校 三年 吉田 明仁 25

資料

第三十七回「全日本中学生水の作文コンクール」募集ポスター

第三十七回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

第三十七回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿

第三十七回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

第三十七回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

第三十七回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

44 43 42 41 40 39

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

かけがえのない「水」への思い

愛媛県 松山市立椿中学校 三年 天野 加奈子

私には水にまつわる楽しい思い出がある。幼い頃、父の仕事の関係で松山市外に住んでいた。そこは自然が豊かで、休日には川辺で水遊びやキャンプをしていた。身近なところに豊かな水があふれていた。また、夏休みになると、松山に住む祖母のところにいき、いとこたちと水遊びをしていた。ホースで水の掛け合いをしたり、ビニールプールで泳いだりした。

「水は冷たくて気持ちいいから、楽しく遊んでいいんだよ。」祖母の優しい言葉とみんなの笑い声が、今でも耳に残っている。

数年後、私たちは松山に引越し、祖母の近所で暮らすことになった。そこで最初に驚いたのが、近くを流れる重信川の水量の少なさだった。河原は石ころだらけで、川遊びをしている人をほとんど見かけない。至るところに「水を大切に!」「節水しよう!」というポスターやシールが貼られている。松山の人は水を大切にしていることを知った。なぜだろう。その疑問を、父にぶつけてみた。するとこう返ってきた。

「おばあちゃんの家は、昔農家だったから、水源が地下水なんだ。だから普段は気にせず、自由に水を使っている。でも、一般の家庭は、ダムから引いた水道を使っているから、節水に気を付けなければならぬ。そして、他のどの地域よりも松山の人が水の使い方に敏感なのは、ある出来事があったからなんだ。」

父は話を続けた。

「加奈子が生まれるずっと前の平成六年、松山で大渇水が起こった。雨が降らないせいで、ダムの水が涸れてしまった。給水制限があり、一日に二、三時間しか水が出ない日もあった。給水車が地域を回って水を配ったりもした。」

「じゃあ、お風呂やトイレは?」

「入りたいときにお風呂に入れないから、タオルで体を拭いて我慢したこともあった。バケツに水を溜めておき、ひしゃくですくってトイレに

流していたよ。渇水のせいで、当たり前の生活ができなくなってしまったんだ。もつと困っていたのは、水を使う仕事をしてきた人たちだった。知り合いの理髪店では、お客さんの髪を洗うためにバケツに水を溜めていたけど、それが足りなくなると、営業時間を短くするなど、本当に苦労していた。」

父の話に大きな衝撃を受けた。そして、松山の人たちが水を大切にしている理由が分かった。水は当たり前にあるものではないことを、身染みて知っているのである。

振り返ってみると、私にも水の大切さに気付く機会があった。公共のプールの開始が遅れたのはなぜだろう。テレビをつけると毎日石手川ダムの貯水率を放送しているのはなぜだろう。前に書いた理髪店は、大渇水の後、お店に貯水タンクを設置したらしい。水を出しっ放しにしている自分が、ひどく恥ずかしくなってきた。

人類は大昔から、水のあるところに村を作り、田畑を耕して生活してきた。水の豊富な大河に沿って文明が栄え、私たちの暮らしのもととなった。生命の源である大切な水を私たちのところに届けるために、ダムや河川、浄水場、水道課など、多くの方々が関わってくださっている。これらのことを、忘れてはならない。

今回のことで、水についてたくさんのお話を学んだ。水について知り、考えることができた。蛇口はこまめに止める、水を溜めて食器を洗う、お風呂の水を再利用するなど、これからの生活を見直すきっかけになった。

かけがえのない資源「水」

これからも水と、届けてくれる方たちへの感謝の気持ちを大切にしていきたい。水資源を守るために、身近なところから、「節水」につながる取り組みをしていきたいと思う。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

努力の結晶

福島県 鏡石町立鏡石中学校 二年 柳沼 優吏

水道の蛇口をひねる。滝のように水が流れた。触ってみる。「冷たい。」コップも使わず、手ですくい一口飲んだ。「うまい。」僕ののどを潤す冷たい感触。しかし、当たり前前の日常はある日突然とぎれてしまった。

その日、僕は学校にいた。手を洗おうとして蛇口をひねったとたん、大地が大きく揺れた。東日本大震災が起きたのだ。当時、小学三年生だった僕は恐怖におびえ、ただその場にしゃがんでいることしかできなかった。何分たっただろうか。僕には気の遠くなるほどの長い時間が過ぎ、やっと揺れはおさまった。ほっとしたのと同時に、ある異変に気づいた。蛇口が開いているにもかかわらず、水が出ない。しかし、その時の僕は、そんな状況よりも、家がどうなっているか、家族が無事かが心配でならなかった。

急いで家に帰ると、家の中が大変なことになっていた。床には、戸棚やタンスから落ちた物が散乱していて、それを母が懸命に片付けていた。「水も出ないし、電気もつかないの。でも、明日には直ると思うから、それまではがまんしてね。」そう優しく言う母を信じるしかなかった。

しかし、翌日、水は出なかった。次の日も、そして次の日も……。買い置きしていたペットボトルの水は、なくなってしまった。僕はだんだん腹が立ってきた。手も洗えない。風呂にも入れない。なんて不便なんだろう。どうしてこんな目に遭わなければならないんだろう。つい、いつもの習慣で蛇口を回してしまっただけは、一滴の水も出ない現実には、それまでがまんしていた思いが爆発した。

「お母さんの嘘つき。いつまでたっても出ないじゃないか。いったい、水道局の管理人は何をやってるんだよ。」

今考えると、どれほど母の心を傷つける言葉だったか、無責任な言葉だったかということを知らされる。結局、不便な生活は十日間ほど続いた。

安心して水が飲めるようになり、学年が一つ上がった頃、校外学習として浄水場の見学に行くことになった。そこで僕は、職員のお兄さんから、浄水場と下水処理場のしくみ、そして震災のときの話を聞いた。具体的には、浄水場は水を飲み水にする所、下水処理場は汚れた水をきれいにし、また使えるようにする所だと教えられた。また、震災時には、家にも帰らず、泊まり込みで機械を直したり、薬の調整などを一生懸命に行っていたという話を聞いた。すべては「みんなのために。」という気持ちからだ。そんな苦勞も知らず、自分のことしか考えていなかった僕……。情けなくて仕方がなかった。お兄さんは、コップに水をくみ、優しくこう続けた。

「この水はね、『努力の結晶』なんだよ。水だけでなく、すべてがそうなんだよ。この町も、地球も、君たちも、努力があるから成り立っているんだよ。」

東日本大震災は、多くの犠牲と被害をもたらした。しかし、僕は、日本人が忘れかけていた大切なことを思い出させてくれるきっかけになったと思う。それは、命の重みや思いやりの心、そして物を大事にすることや節約の精神だ。震災後、僕の家でも学校でも、「節約」を心がけるようになったと感じる。「節約」は当たり前のことかもしれない。けれど、当たり前のことを当たり前に行うことが、「努力の結晶への感謝」ではないだろうか。当たり前に使っている水も電気も、その陰には大きな努力が隠されているのだ。

僕は、震災後に初めて水が出たときの喜びを忘れることはないだろう。だから、水道の水を飲んだとき、当たり前前に水が使える幸せに対して、「ありがとう。」と感じる心を大事にしていきたい。

農林水産大臣賞（優秀賞）

過去から未来へ

栃木県

佐野日本大学中等教育学校 一年

石川 未彩

今、私たちの家の水道のじゃ口から出てくるきれいな水は、先人の血と汗となみだの結晶です。

私の暮らす栃木県には、安積疏水、琵琶湖疏水と並ぶ日本三大疏水の一つ、那須疏水があります。那須疏水は、初代栃木県令の鍋島幹、地元の有力量であった印南丈作と矢板武らの尽力により、明治十八年九月、那須野が原大農場の飲用、かんがい用として完成しました。

小学四年の秋、私は校外学習でその那須疏水を訪ねました。那須塩原市の那珂川では水の取り入れ口を見学しました。石を組んで作られた水門はコケがむし、とても重厚で、その姿は今でもよく覚えています。その取り入れ口は、これまでに大きく四回改築されており、いかに維持が大変であったかがわかりました。

那須野が原博物館では開拓の様子や疏水完成までの過程を学び、おけを使った水運び、もっこをかっいで石運びの体験をしました。石は想像以上に重く、運び終わってしばらくは肩が痛みました。朝から晩までこの作業をした人たちがいたなんて、とおどろきました。私には到底できそうにありません。

工事は難航しました。水路ができて水がしみこんでなかなか流れなかったこともあったそうです。私は、川や湖から水を引くことがこんなに大変なことだとは知りませんでした。あきらめずに努力し、仕事をすすめた先人たちを尊敬します。

疏水が完成した那須野が原は、大規模な稲作地帯となりました。そして疏水は発電、蒸気機関車の給水源にもなり、地域の発展に計り知れない恩恵をもたらしました。

今、家のそばの川を当たり前のように水が流れるのも、先人たちの努力があったからです。私たちはこの川を守る使命があります。川を守り、水を守るために私にできることを考えてみました。

まず一つ目は、汚れた水を川に流さない工夫をすることです。汚れた水をきれいにするためには、大変な量の水とエネルギーが必要になります。台所では洗剤をいすぎないことや、食べ残した汁や油を直接排水口に流さないこと、風呂場ではシャンプーやトリートメントの量を減らすこと。毎日のことなので少し気をつけるだけでも川に流れる汚れの量を減らすことができます。

そして二つ目は、地元で作られたお米や野菜をたくさん食べることで。現在、食料自給率の低下や農家の高齢化など、日本の農業を取り巻く状況は決して明るいものではありません。私の家のそばにもきちんと管理されずに草が生い茂っている田や畑を時折見かけます。耕作されない土地が増えることによって、水路も使われなくなり傷みます。そのような水路はやがて水が流れなくなってしまうかもしれません。カラカラになった水路には生き物もすめなくなりません。もう作物を育てることもできません。土地は荒れ果ててしまいます。それは、先人たちの血のにじむような努力と知恵、技術を無駄にすることになります。

私は今、お米や野菜をつくることはできません。けれども、ご飯をたくさん食べることはできます。地元でとれた食材をつかったご飯を食べることで、農業を活性化させ、田畑を守り、川を守り、そして水を守ることでできるのではないのでしょうか。

先人たちが与えてくれたきれいな水に感謝し、私たちも未来にこの水を残していきたいと思えます。

経済産業大臣賞（優秀賞）

美しい生命の水を守るために

徳島県 鳴門教育大学附属中学校 三年 山根 綾華

春には、川面にあたたかな光を届け、夏には、香り豊かな鮎が食卓を飾り、秋には、土手のススキに風情を感じ、冬には、乾いた川原がどこか物悲しさを醸し出す、我が徳島県が誇る清流、吉野川。

私は、生まれた時から吉野川を見て育ち、その恩恵に預かり、現在に至る。県外から訪れた人は、吉野川の川幅や、まるで海かと思紛う水量の豊かさに圧倒されることが多いそうだ。そんな時、私は少し誇らしい気持ちになる。橋の上から吉野川を眺めると、魚が元氣よく飛び跳ね、昔、春になると家族でしじみを探りに行ったことを懐かしく思い出す。

徳島県には、吉野川をはじめ、那賀川、勝浦川、穴吹川、新町川と、それぞれの地域に密着した川の役割を果たしている。例えば、清流穴吹川では、その水の清らかさに、涼を求め、キャンプや川遊びを楽しむ人々が年間多数訪れる。また、徳島市のシンボルとも言える新町川では、市の中心を流れる観光スポットとして、大きな存在感を与えている。私は、毎日通学途中に眺めるこの川が身近すぎて、きれいな川というのが当たり前に思っていたが、今回、徳島県の河川についてインターネットで調べたり、家族に話を聞いたりして、かつて新町川は工場や家庭の排水で汚染が進み、魚が住めないような「死の川」と呼ばれていたことを知り、大きな衝撃を受けた。阿波踊りの時期になると街を彩る提灯が川面に映え風流な趣を感じさせ、また、新町川沿いはおしゃれなイメージがある。だが、まさか、そんな大好きな川が父母が幼い頃には今の私が見る新町川とのイメージが大きく違って驚いたことに驚いた。しかし、数十年の間に、こんなにきれいな川に生まれ変わったことに、川を甦らせた方々の熱い情熱と努力に感動を覚えた。

蛇口をひねれば、当たり前においしく、安全な水が出てくるのも、たくさんの人々の支えがあることを知った。そして、改めて水の大切さを感じ、守っていくことの重要性を認識した。

ところが、昨年の夏、恵みを与えてくれる河川も、私たちに牙を向く恐ろしさを痛感した。台風による豪雨では、川が氾濫し、ある中学校の校舎の一階部分が全て浸かり、コンビニはその看板だけが水面から顔を出していた。増大する自然災害と人がどう向き合うか、自然と共存していく対処策を再考する時期が来ているのではないだろうか。学校での環境についての学習や、エコ活動に対する取り組みなど、自然との関わりについて、自分なりに知識を深めてきた。だが、急激に迫る温暖化、自然災害への対策を考えることが、私たちにとって“大切な水”を守ることにつながっていくと考える。

私の曾祖母が若い頃には、頑丈な橋がなく台風の度に川が氾濫し、上流から木々や岩石が流れ、荒れ狂う水は潜水橋を越え、精魂込めて育てた作物を無残に流し、また一からの田畑作り。でも台風が去った後には、流木を集め燃料にしたり、川と共存しながら過ごしてきた日々を目を細め、話してくれた。

私は、今こそ水を大切にして、人々のかけがえのない生命や財産を守りたい。私たちの生活を豊かにしてくれる工業や農業用水の整備の拡充、環境に配慮した水力発電の活用など、環境と人とのつながりを真剣に考え、取り組んでいきたいと思う。

我が家でも、雨水を貯めてガーデンングに利用したり、油や汚れた食器は新聞紙で拭いてから洗ったり、洗剤は植物性の製品を選んでいく。一人の力はとても小さいが、一人一人の心がけが大きな力になることを私は信じている。限りある資源は、一度破壊されてしまうと、なかなか元通りには戻らない。美しい生命の水は私たちが守る。さあ、そのアクションをまず私からスタートしていきたい。

国土交通大臣賞（優秀賞）

かけがえのない水

忘れもしない平成二十三年三月十一日。東日本大震災で私達の住む福島も大きな被害を受けた。恐怖に震える中、ライフラインが寸断され、蛇口をひねれば当たり前に出てくると思っていた水も止まってしまった。飲み水、料理、トイレ、風呂など普段の生活になくはならない水。数日もの間、行列に並んで給水車から分けてもらうことでした。手に入らなくなり、水のありがたみを身をもって感じた。

しかし、あれから四年。復興が進み日常を取り戻した今、時間の経過とともにあのありがたみ、水を大事にするという感覚が少し薄れてきたかもしれない。そんな私に改めて水の大切さを考える出来事があった。

昨年の秋、福島市中学生海外派遣団の一員としてオーストラリアで短期留学を経験した時のことだ。私が訪れたクイーンズランド州のブリスベンでは、数年前に大渇水があり、給水制限があるというのだ。ホームステイ先で

「シャワーの時間は短めに、五分位でね。」

と言われ、正直驚いた。豊かな自然、コアラやカンガルーが思い浮かぶこの国で、水不足というイメージがあまりにもかけ離れていたからだ。

実際に街並を見ても、高層ビルが立ち並び、緑があふれ、公園も多く川も流れていて自然の多い環境だった。現地で交流したスクールバディ達にもそれぞれの家庭の水事情を聞いてみた。すると、シャワーの時間制限があったり、浴室にバスタブはあるものの、大量のお湯を使いたくないとそこに毛布や衣服を入れておきたい。また、使った食器を洗わず洗剤の泡につけ、それをふきとるだけだったりと水に対する意識は日本とは全く違い、驚くばかりだった。

自分でも調べてみると、オーストラリアは人間が住む大陸の中で最も乾燥している地域であった。「本土の約八十パーセントは砂漠でできている」ということ、「低降水量、高温の砂漠気候とみなせる地域が広く存在すること」。これらが水不足を引き起こす原因で経済と生活に深刻な影響

福島県 福島市立北信中学校 三年 遠藤 亮佑

を与えているということが分かった。その対策として政府が「未来のための水資源」という取り組みの一つとして給水制限というシステムを行っているのだった。

日本だと無限にあると錯覚してしまいそうな位の水。けれど、世界で分け合う必要不可欠な資源の一つであると考えさせられた。

またこの四月、修学旅行の班別自主研修先に東京都水の科学館を選んだ。水についてもっと知りたいと思ったからだ。科学館では、水の循環をたどり水の旅を体感することができた。自然の恵みを大きく受けていることを学び、環境に配慮することも大切だと認識した。またこの地球には、十四億立方キロメートルの水があると知られている。またこのうちの九十五・五パーセントは海の水で陸の水はごくわずかだ。しかもそのほとんどは南極や北極の水。利用できる水は、地球上の水のわずか〇・〇一パーセントしかないということを知り、改めて水の大切さを考え直す機会となった。

様々な経験をふまえ、自分に何か出来ることはないかと考えた。その時、母の行動が目についた。風呂の残り湯を洗濯に使い、米のとぎ汁を庭木の水やりとして使用していた。早速私もオーストラリアで経験した時のようにシャワーの時間を制限することにした。だからだとシャワーを浴びないおかげで時間も短縮できる。小さなことかもしれないが、私達のような未来を担う次世代が進んで行動を起こし、出来ることから始めていきたい。

環境大臣賞（優秀賞）

四季の味がする水

しんしんと雪が降り、雪かきにも少し疲れたとき、ふと軒先にできた水柱の、

「トントン」

という音を聞くと、だんだん春が近づいているんだと感じ、今年の水はどんな味だろうといつもわくわくしています。なぜなら、その水は、山から出てくる水だからです。周りには、川がなく、山の奥深くの地下から湧き出てくる水で、何日も日照りが続いても、一度も涸れたことがない、とても不思議な水です。

この不思議な水が飲める祖父の家では、水の味が四季折々に変化し楽しむことができます。春の水の味は、冬の雪解け水なので、さらさらとして夏の氷水のように甘く、そしてやわらかくやさしい味がします。夏の水は、とても冷たく、冷蔵庫で冷やした麦茶のように、少し葉っぱの味がします。秋の水は、どっしりとした温かみのある岩風呂の温泉の水のような味がします。冬の水は、とても温かく、ほんのり甘酒のような甘い味がします。

残雪の中、雪を少しかき分け、ふきのとうを採り、この水で洗って作った、ふきみそやふきのとうの天ぷらは、少し苦みがあるがだんだんと口の中に甘さが広がります。また、太陽の光をたくさん浴びた夏野菜の茄子や胡瓜、瓜などもこの水で冷やすと、砂糖水のような甘さが加わり、体全体においしさがしみわたります。

毎日の生活をする中で一番水がおいしく感じるのは、炊きたてのご飯を食べた時です。これがおいしいのも作るときに、不思議な水を使っているからだと思います。また、米をといでいる時に感じるのは、水の温度が一定だということです。水道水の場合、夏はぬるく、冬は冷たいと感じますが、この水は真逆で夏は冷たく、冬はあたたかいです。

この水は、冬の雪が深く関わっています。大雪が降った翌年は豊作に、暖冬だと、米粒が少し小さくなる傾向があります。私は、大変だと思

福島県 福島大学附属中学校 三年 鈴木 康源

ながら、雪かきをしています。作物を支えてくれていて大切な水が変化していると思うと、だんだん雪かきも楽しくなってきました。これと同時に、雪のありがたさや大切さそして、自然のすばらしさにすごく感動してしまいます。

畑の作業にも違いがあります。水が必要な作物には、この水を使っています。特に、味が違いがあるのは、里芋です。夏にたくさん水を与えた里芋は、秋に収穫したとき、とても大きく、食べるとねばりけがあり、ほくほくしていてとてもおいしいです。

山の水がどんなところから、流れてきているのか興味があり、祖父と一緒に見に行きました。どんだん山の中に入って行くと、足元に落ちている木々を踏み、パキパキと音がして、水の流れる音は全然聞こえませんが、さらに進んで行くと、鳥のさえずりや、時々野うさぎの足音が聞こえてきます。そしてようやく、山の奥深くに入った時、祖父が、「ここだと聞こえるかも。」

と、言われ、ゆっくり近づいて行くと、私の耳にかすかに聴こえてきました。

「きりきり、さあさあ、チンチロ。」
と、やさしくてやわらかい水の音がします。まるでハーブのきれいな音とソプラノリコーダーのドのような音に聞こえます。この水の音を聞くと、今年もおいしい米やおいしい野菜そして、おいしい水が飲めると期待で胸がいっぱいです。自然は、こんな音でも勇氣や元気をわけ与えてくれることに、私達人間は、自然の恵みに生かされているんだと感じることができた瞬間でした。

自然から与えられたこの山の水は、幸せを運んでくれます。この水が飲めるのも、先人達のたゆまぬ努力と、未来に残したいという思いやりが、水の生命力となって、私達の命を支えてくれています。大切な水を私は今と同じ状態で守り、残して行きたいと思えます。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

水の輝き、それは命の源

徳島県

鳴門教育大学附属中学校

三年

井村 華子

キラキラと輝く命の源・・・「水」。水道の蛇口を開けると、絶え間なく流れる水が私をうるおしてくれる。「冷たい。」と感じるのも、心地良い瞬間なのだ。蛇口から流れる一本の水の集合体。私はこの水の流れるさまをじっと見つめながら、「命の源」である水の力強さを感じ取っていたのだ。

「水」と聞くと、一番に脳裏に浮かぶのは、私が東京へ行った時に「ユニセフ協会」を訪れたことである。ずっと前から世界の他の国々の生活に興味があり、一度は訪れたいと思っていたのだ。そこでは、私の「水」に対する考えをガラッと変えてくれた、深い重みある体験があった。

発展途上国。そこには学校に行きたくてもお金が足りず、行けない子供達がたくさんいる。そして、少しでも稼ごうと、一日に何時間も仕事をして家族を支え続けている子供もいる。しかし、そんな子供達に襲いかかるのは、感染症などの病気である。感染症は、命の源である「水」にも影響しているのだ。

他にも、こんな衝撃的な映像を見た。朝早くから子供達が大きな水瓶を持って、何キロメートルも離れた川や池まで歩き、水をくみ上げている。私たちの生活では全く想像がつかない。毎日、飲みたい時に蛇口をひねると出てくる水。体を洗おうとすると、いくらでもシャワーから流れてくる水。水不足に困ったこともなかった私には、そこで見た発展途上国の人々の生活から、大きな衝撃を与えられたのだった。「川」といっても、決して安全な水ではない。川には微生物もいて、泥が混ざっていたりもする。私たち日本人なら、こんな不衛生な川の水には一切手をつけないだろう。

私たちにとっては「当たり前の水」が、国が違うだけで「なかなか得られない水」であるのだ。私は改めて、水という資源は大変貴重なものであり、私たちの生活になくてはならないものだと感じたのである。

私は今まで、毎日たくさんのお水を使ってきた。朝起きると水で顔を洗い、コップ一杯の水を飲み、湯のはったお風呂に入る・・・もし水がなかったら、こんな豊かな生活は出来ないことだろう。しかしそれが今、世界には水への苦難に直面している事実もあるのだ。安全な水が手に入らず、怯えながら生活している人のために手助けしていくのは、私たちしかいないのである。今まで自由に使い放題に使ってきた自分をもう一度見つめ直し、発展途上国で起きている病気などに、ストップをかけることが私たちの使命なのである。私は心の中で、今自分のやるべき事をささやいてみた。

何が出来るか。まずは、私が知り学んだ、発展途上国での生活をたくさんの人に知ってもらおうことだ。日本という小さな集団の中だけの知識では、水の尊さだつて分からない。しかし、世界に視野を広げることで、私のように当たり前だと思っていたことが実は全く違うこともあるのだ。そうして、水の尊さに気付いてもらいたい。

私は小さい頃から水泳選手として、目標に向かってプールの泳ぎ続けている。あの、何とも言えない水の輝き、水がたてる音、そして透明感。今思い返せば、そんな中で泳いでいた私はどんなに幸福だったことだろうか・・・。「水」というものは、人々を幸福にし、安らぎを与えてくれる財産なのである。だからこそ、私たちは常に財産を大切に使う必要があると思うのだ。

水。それは力強い大地からの恵み。そして、私たちと共に生きていく重要な資源。普段何げなく使ってきた水をこれからはどのように使うべきなのだろう。毎日目にしているあの水の輝きが、以前より一層、輝いているように見えた。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

滝沢ダムの一滴

埼玉県 秩父市立荒川中学校 三年 宮田 帆乃香

「キラキラキラ……。」

太陽の光が水面に反射して光り輝いている。

私が住んでいるここは秩父市大滝。全体の九割が山に囲まれ、杉や松などの針葉樹林が生い茂る、自然豊かな場所である。眼下には荒川の支流、中津川が流れ、ヤマメやイワナなどの魚が悠々と泳いでいる。

そんな大滝には『三峰神代神楽』という、伝統芸能がある。神楽は明治時代から滝ノ沢地区で受け継がれていたが、滝ノ沢地区はダムの底に沈んでしまった。それでも、毎年五月八日のお祭りで神楽を舞ったり、大滝中学校でも神楽師の方々に教えていただいたりしながら神楽を守ってきた。

しかし、大滝中学校はこの春荒川中学校と統合し、私の母校は廃校となってしまった。

神楽師の方々も高齢になり、大滝中学校が無くなるのと同時に、とうとう大滝の伝統芸能『三峰神代神楽』までもが消えてしまったのだ。幼い頃から神楽を見てきた私にとって、神楽が無くなるということはとても悲しい。きつと大滝のみんなも同じ気持ちであろう。

昭和四十年にダム建設の調査が始まったが、住民の反対意見も多かったため完成には時間がかかり、完成したのは平成二十年になった。以前、滝ノ沢地区に住んでいた方に話をしていた時、その瞳には涙が浮かんでいた。ダムを建設する為とはいえ、これまで住んでいた自分達の地区が破壊されてしまうということが、いかに辛いことか。

無くなってしまった地区は滝ノ沢地区だけではない。浜平地区、塩沢地区、廿六木地区。

四つの地区が無くなり、私達の学校が無くなり、神楽が失われたのはダムを造った影響が大きい。

住民達の生活を奪ったダムを造る理由があるのだろうか、私は怒りを

覚えながらダムについて調べることにした。

すると、ダムには重要な役割があることが分かった。

まず、大規模な洪水を防ぐことだ。大雨が降っても、ダムが雨水を貯めて少しずつ流しているから洪水の虞が無い。私の祖母は、

「昔は『鉄砲水』というものがあって、大雨の後にすさまじい音と勢いで水が流れてきて川が氾濫することがあって、大変だったんだよ。今はダムがあるから、鉄砲水がなくて安心だよ。」

と嬉しそうに話していた。

その上、ダムは下流に住む人達に水を供給している。雨が止んで全然降らなくなってしまった時に、少しずつ水を流している。そうすることで、東京都や私達、埼玉県の人が水に困ることが無いようにしている。

他にも水力発電などの役割も果たしていることを知った。

調べれば調べる程、ダムは私達の暮らしになくてはならないものだということを痛感した。実際、ダムを造ることで悲しんだ人はたくさんいる。しかし同時に、ダムが出来たことで笑顔になった人もたくさんいるということだ。そして今では、滝沢ダムは大滝にしっかりと根付き、私達の生活になくてはならないものとなっている。

初めは、ダムは無くていいのではないかと思った。しかし、今ではたくさんの人々がダムを必要としていることが分かった。人々の生活を支え、大切にされている滝沢ダムを私は誇りに思う。

建設までの様々な壁を乗り越えて出来たダムの水の一滴滴を無駄にすることなく大切に使っていきたい。

滝沢ダムは、今日もたくさんの人々の暮らしを支えている。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

先人たちが残した水の恵み

山梨県 北杜市立甲陵中学校 二年 小林 礼佳

甲府盆地の西にそびえる、南アルプスの山並み。その麓に広がる御勅使川扇状地のほぼ中央部に、私の住む「南アルプス市」があります。

六月に入ると、真つ赤に実ったサクランボを求めて、県内外からたくさんのお客が訪れ、街が活気に満ちあふれます。今は、新緑が芽吹いたサクランボや桃の木々の根元で、毎日のようにスプリンクラーが回り、キラキラと光る水しぶきをあげながら散水が行われています。その水を吸い上げ、木々は更に葉を茂らせ実をふくらませてきています。スプリンクラーの散水の様子を目にすると、夏の訪れを感じ、爽やかな気持ちになります。

「南アルプス」という言葉から、清々しい水がこんこんと湧き出すイメージを持たれる方も少なくないと思います。

そんな南アルプス市内において、少し土を掘り返すと小石がゴロゴロと出てくる河原のような土地であるのに、自然の川が存在せず「月夜にも焼ける（乾燥する）」と呼ばれた地域があります。それが、私の住む西野地区です。

その昔、西野地区は水不足に苦しみ、干ばつに悩まされ続けました。こうした荒れた土地に住みながらも、先人たちは、耕作できる作物を探し、ねばり強く品種改良を重ね、血のにじむような努力により、この地の特徴をうまく生かした果樹の栽培に成功したのです。そして現在では、桃、すもも、サクランボ、柿など多種の果物が実り、フルーツ王国山梨の一端を担う産地となっています。

南アルプスの農業の歴史は、同時に、水との壮絶な戦いの歴史であったと言っても過言ではありません。

川の無かった私たちの地域では、生活用水農業用水のほぼ全てを、池に溜めた水に頼らざるを得ませんでした。住宅の屋根に降る雨をもトヨで集めて生活用水として利用したり溜池の周囲にケヤキや竹を植え、せ

つかく集めた水が腐ってしまうのを防いだりしたそうです。現在でも近所を歩くと、いたるところに、溜池やケヤキの大木を目にすることが出来ます。

農家の人たちは「釜無川右岸土地改良区連合」という組織を立ち上げ、大型の貯水池作り、そこから、地中に埋めたパイプを通して家々の畑に水が届けられるようになりました。現在でも農家の人たちは、みんなでお金を出しあい、いつでも畑の作物に水が与えられるように、施設の点検やスプリンクラーの整備を行っているそうです。

しかし先日、貯水池の近くを通りかかった際の事です。貯水槽の水の表面に、ゴミや空のペットボトルが浮かんでいるのを目にしました。

一滴の水をも無駄にすまいと取り組んだ先人たちの労苦を思うと、その光景はとても残念で胸が痛みました。水で苦労した地域の歴史を知っていれば、こんな事が出来るはずがないだろうと思うと、とても悲しくなりました。

今、蛇口をひねれば、水はふんだんに使うことが出来ます。でも、この地区ではほんの五十年前からの事だそうです。

普段、私たちは、そのような歴史を考えながら水を使っているのでしょうか。「水を大切にしよう」と、声高に叫ぶことは簡単ですが、この地に住む者として、先人たちの水との戦いの歴史を知ることが、水を大切にしようという意識の第一歩につながっていくのではないのかと感じます。

今年もまた、サクランボ狩りの季節がやってきます。口に含むと、弾けるように広がる甘みと食感は、まさに「水の恵み」に他なりません。この恵みが、ずっと先の未来まで続くことを願い、日々、私たちも水を大切に使っていきたいです。

全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞（優秀賞）

私たちの水資源

徳島県 阿南市立那賀川中学校 三年 廣瀬 萌瑚

「ここら辺は夜になるとタヌキも出るな。」と笑う父。弟のバイクレースの観戦に行った日曜日のことだ。レース場は人家から遠く離れた森の中にあつた。

仮設トイレの前には水の入った二リットルのペットボトルが三本。初めは不思議に思ったが、「最小限度の水で処理をしましょう。」の張り紙で汚物の処理のためだと分かった。「自然の中で活動するには、自分勝手ではないけれどよ。」父の言葉にうなずきながら、動物たちの庭を少し貸してもらっているようで、どこからかタヌキの声が聞こえた気がした。

「この水は井戸水です。飲めますが、生水は飲まないで下さい。」テント横の蛇口の前に大きく書かれた文字。考えてみると、井戸水も上水道も飲める国「日本」。当たり前のことのようにだが、これは世界全体で考えて本当に当たり前なのだろうか。山道を降りながらほとんど疑問が大きくなってきた。

「日本のように上水道を飲むことができる国はどれだけありますか。」突然の私の電話に厚生労働省の係の方はわざわざ「国連の資料」を調べていただき、後日丁寧に回答してくださった。平成十六年度の資料では、わずかに十三カ国だという答えに大変驚いた。

日本の上水道普及率は平成二十五年の厚生労働省の調査によると九十七、七パーセント。私の住む阿南市は一級河川「那賀川」の下流に位置し、豊富な水に恵まれた地域だ。調べてみると阿南市の取水・配水施設は十八カ所ある、そのほとんどが那賀川水系からの地下水を利用していい。なんだかうれしくなった。都会でよく見かけるように、多くの水道水が浄水場を通り家庭へ送られているのに対して、「私たちの水」は特別な浄水処理をしなくても安全で安心な「飲める水」を確保できているということだと思つたからだ。それは、言葉を換えれば「那賀川」の水質の安全性を示していると言えるのではないか。安全な水を守るため、阿

南市でも那賀川流域の水質汚濁を防ぎ、水源の保護を図る目的で平成七年に阿南市水道水源保護条例を制定し、市内の六十三パーセントを指定地域としている。

しかし、水資源を利用しているのは私たちだ。大人の世界に全てを任せるのは無責任だと思う。この恵まれた水環境の中で私たちができる、より地球に負担をかけない水の使い方について私なりに考えてみた。

まず、私の提案で我が家の水道年間使用量を五年間拾い出してみた。すると家族の予想に反して夏場よりも冬場のほうが多いことが分かった。家族で考え、入浴が主な原因で、夏場は家族それぞれがシャワーで済ませるのに対し、冬場は浴槽にお湯を張ることで使用量が増えたのだと分析した。確かに、一般的に家庭用水で一番多く使われるのは風呂の水だといわれている。我が家では浴槽に油性マジックで今までも二センチ低い場所に線を引くことにし、シャワーのノズルも節水ノズルに変え、「出しっぱなし禁止」という家庭ルールも作った。これはもちろん一例だが生活が多様化している現在、節水に対するそれぞれの家庭のスタイルにあつた節水方を探すことが今求められているように感じる。

一杯の味噌汁を魚が住める水にするには風呂桶五杯分もの水が必要となると言われている。限りある自然の中に住む私たちの役割は地球に負担をかけずにきれいな状態で水を戻す方法を考え、実践することだと思ふ。

水は生命を育み、豊かで衛生的な暮らしを支えている。台所や風呂の排水、水洗トイレの溜まった水は、害虫や臭いにフタをしてくれている。公園の噴水、テーマパークの水を使った演出は感動と癒やしの空間を創り、私たちにかげがえのない時間を与えてくれる。

こんな大切な水を守るため、私たち自身が身近なところから地球の負担を減らす努力をしていく必要がある。今、強く思っている。

入選

使い分けの知恵に学ぶ

岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校 三年 佐藤 暢

シャツ。シャツ。水がじわじわと広がっていく。アスファルトが黒く染まっていくのをじっと眺める。自分の足元に流れてきた水がサングラスを濡らしそうになって、慌ててかかとを後ろに下げる。そんなことを繰り返していると、ふとした拍子につまずいて、すてん、と尻餅をつく。それを見て祖母が楽しそうに笑う。小学校に入学したばかりの夏には、じょうろを持って駆け回った幼い頃の私のことを、祖父がよく話してくれる。地面に打ち水をするとう涼しくなると絵本で読んで、それを真似ると、自分も絵本の登場人物になったような気がして嬉しかったことを、今でもよく覚えていてる。

つい最近知ったことなのか、アスファルトの道路に打ち水をして、期待できる効果は小さいという。それを私に教えてくれたのは大叔父だった。彼は山の麓に住んでいる。栗の木に囲まれた自然豊かな閑静なところだ。彼は木々の間に開けた一か所を指差して、「こう言った。「見てごらん。水が湧き出ているだろう。あれを打ち水に利用するんだ。あの水は浄化しないと飲むことができないから、使い分けるんだよ。」そして、アスファルトに打ち水を行っても水があまり染み込まないから、保水力の高い土に行くべきなんだよ、と続けた。なるほど、よく見てみると、湧き出ている水はすこしばかり濁っていた。彼の話を聞いていて、なんだか引つかかる言葉があった。「使い分ける」とはどういうことだろう。蛇口を捻れば水が出る。当たり前のことだ。私がなにもしなくても、出てきた水は飲むことができる。家の中のどの蛇口を捻っても、みな同じように水が出てくる。私の知っている水はどれも透明で、どれも同じだ。だから、「使い分ける」と言われても、すぐにはピンとこなかった。水を使い分けるとはどういうことなのだろうか。いつ、どのように使い分ければよいのだろうか。

少し考えてみたら意外に身近なところに答えがあった。洗濯だ。我が家では、洗濯の時に風呂の残り湯を再利用する。浴槽の中の水にポンプを入れ、その水を洗濯機に送って衣服を洗う。残り湯を利用すると、汚れが落ちやすいと言われているからだ。しかし、すぎの場合は、蛇口から出るきれいな水をそのまま使う。他にもある。きれいな水で米を研ぎ、その研ぎ汁を植物の水やりに利用する。研ぎ汁には多くの栄養分が含まれていて、植物の生育に必要な養分も含まれている。もしかしたら、私が気付かなかっただけで、実際はもっと多くの水の使い分けがされているのではないだろうか。

ところで、今から四〇〇年ほど前の江戸の町では、様々なもののリサイクルがされていたという。もちろん、使い分けによるリサイクルもある。例えば、大人用の着物を古着屋で買ったとする。古くなれば使える部分で子ども用の着物に作り直す。再利用できない部分や作り直す際に出る端切れは端切れ屋が買ってくれる。端切れ屋は、回収した端切れをつなぎ合わせて布団などを作っていた。このように、布を再利用できる部分と再利用できない部分とで使い分けていたそう。

このことは、水の使い分けにも当てはまるのではないだろうか。水を使い分けるといえることは、「再利用できる水とその使い道を考える」ということに言い換えることができるからだ。水を使うとき、蛇口を捻る前にその手を一度止めて考えてみよう。本当に蛇口の水が必要か、一度ほかのことに利用した水の再利用でもよいのではないか。水の使い分けは、節水にもつながる。一人一人が水の使い分けに対する高い意識を持ち、実行に移すこそが、水の有効活用において最も大切なことだと私は思う。江戸の町の知恵を、現代に生かしてみたい。

入選

「意識」を変えろ

宮城県 登米市立中田中学校 三年 渡邊 ちなみ

私の家のすぐ後ろを、日本で四番目に長い北上川が悠々と流れていま

ない「電気」とも深く関わっているのです。

この北上川は岩手県の弓弭の泉に源を発し、北上市や盛岡市、花巻市

そしてそれは、水力発電のことです。

水力発電とは、水が高いところから低いところへ落ちる時の力を利用して水車と直結した発電機で電気をおこす仕組みの発電です。

私の住む登米市の上水道の全てが、この北上川から引かれています。

宮城県でも、北上川から約十か所もの水力発電を行っています。

浄水場で川の水を私達が飲めるくらいまで綺麗にし、各家庭に供給しているのです。

自然エネルギーによる発電は、他には太陽光発電や風力発電、地熱発電などがあります。

私は小学生の時、学校のみんなで浄水場を見学し、水が綺麗になって

ですがこれらの発電方法には、天候によって電気が作れる量が左右されることや費用が高いこと、場所の確保などの様々な問題点があります。

いく工程を見ながらその工程の多さと手間にとっても驚きました。

しかし私達は、その問題点を克服し、更に三十年後、五十年後、百年後の先を見据え、想像した未来設計をしなければなりません。

そして六年生の夏休み、実験キットを使って北上川の水素イオン指数

やアンモニア態窒素を調べました。

その結果、北上川はとても綺麗だということが分かりました。

費用と時間がかかります。

生活雑排水やし尿、工業排水による汚染がとても少なかったのです。

そこで日本が発電の意識を変えることで、世界の国々の協力を仰ぎ、地球を守る力になれるのではないのでしょうか。

私はこの結果から、日々の生活で排出される汚水を減らすことが川の

水が安定して供給されることや、みんなが安心して暮らすにはやはり

水をきれいに保つことに深く関わっていることに気づきました。

「意識」を変えること、改めることが重要です。

水の節水や雨水の活用などのアイデアはよく耳にしますが、最近

今自分が安心して暮らせることに満足せず、今自分が綺麗で美味しい水を口にすることができると感じる感じが、日々の自分の行動と自然や周りの環境との関連性を常に感じながら生きていくことで、環境保全への第一歩を踏み出すことができるはず

化アルミニウムや消石灰などの薬の量も減って一石二鳥です。

そしてこれからの地域を発展させ、活性化させていく立場になるのは私達です。

それにはたくさんの方が、自分の行動がいかに自然に影響を与えているのか、そしてどうすればそれらを守っていくことができるのかを一度

私はいくらもつと色々なことを学び、環境や自然を守ることを日々意識し、大切にしながら社会と関わっていききたいです。

入選

私の生活と水

日本には「湯水のように」という言葉がある。惜しげもなく使うことを表す言葉である。それほど、日本は水に恵まれた国なのだと思う。

身のまわりを振り返っても、水に頼っているものが多くある。田畑を潤し作物を育てるのにも水は欠かせない。風呂や洗濯など、どれも水がなくてはならない。私の生活は水がなければ成り立たない。私たちは水で困ることなどほとんどない。私には水が大切なものであることを実感する体験がある。

母の実家は中国にある。これまで、私は母の実家を訪ねる機会が何度かあった。祖父母の実家は、私の常識を覆すものだった。祖父母の家には浴槽がなく、シャワーだけだった。それは文化の違いなのかもしれないが、蛇口から出た水を直接飲むことができないことに驚いた。飲み水は店で買うか、水道水を一度沸かしたものを飲んでいった。日本では捨ててしまう洗濯に使った水でトイレは流していた。

環境の違いに衝撃を受けたが、もっと驚くことがあった。店の飲料水の売り場が、ジュースの売り場より広かったことだ。日本の公園でよく見られる水飲み場はなかった。日本での生活になれてしまった当時八歳の私は、あまり外に出たがろうとしなかった。母は常に私を気にかけてくれていたが、水が自由に使えないだけで、私は外に出ることを嫌がっていた。

中国での水を取り巻く環境の違いを体験した私は、帰国して水のありがたみを感じた。飲み水はもちろん、トイレを流す水があったり、浴槽も毎日水を張り替えて入浴できたりする。日本では当たり前のように感じることを、とても幸せだと思えた。

しかし、その気持ちは長く続かず、豊かな水のある生活にすぐに慣れ、私の生活は水を無駄にする生活へと変わってしまった。手を洗うとき、髪を洗うとき、食器を洗うとき、水は出しっぱなしだった。私は無意識のうちに、水が使えるありがたさを忘れ、水が自由に使えること

福島県 平田村立蓬田中学校 二年 上遠野 幸

を、当たり前だと思い込んでしまっていた。

つい先日、母が私に中国へ帰省することを告げた。私はとてもショックを受けた。水が自由に使える日本を離れ、また水が自由に使えない所へ行かなくてはならないのかと思うと心が沈んだ。それと同時に、以前中国から帰国した時に感じた水のありがたみを忘れ、水を無駄にしている自分を反省した。私が当たり前のように無駄にしていた水は、水を自由に使えないところでは貴重で、大切な水だったのだ。

私の中国での体験は一ヶ月ほどで、中国の状況しか知らない。私の祖父母が住むところのような環境も、飲み水にも困る国よりは恵まれているのかもしれない。水について考えてみると、水はやはり大切な資源なのだと思う。母から帰省の話を聞いた日から、水の大切さを思い出し、水を無駄にしないように注意するようになった。それ以来、何をするときにも必要な量を考えて水を使うようにしている。

私は知識は理解へ、理解は解決へとつながっていくと思う。世界で約七億人の人が水不足の状況の中で生活していることを最近知った。世界の人口の十人に一人の割合である。現代ではメディアを通して、世界の状況を知ることができる。人口の増加や、地球温暖化による異常気象など、これから水に関わる問題は拡大していくのかもしれない。そんな現代だからこそ、私たちは視野を広げて、水資源について理解しなければならぬ。

世界の中ではもちろんだが、現代の日本でも「湯水のように」という言葉は当たり前ではなくなっているように思う。私には必要以上の水を使わないということしか思いつかないが、母と中国に帰省するときまでもう少し考えて行動できるようにしたい。

入選

香川の水事情を聞いて

千葉県 八千代松陰中学校 三年 加藤 咲希

私は、母の実家である香川県で生まれました。今でも年に数回、帰省しています。私は香川が大好きです。

その香川は、瀬戸内海に面していて、暖かい気候でとても過ごしやすいく所です。高台にある丸亀城から街を見下ろすと、太陽に反射してキラキラと輝く場所が、いくつか見えます。それは「ため池」です。

香川県は、温暖な気候ですが雨が少なく、四国山脈に降った雨が、瀬戸内海に流れ出るまでの距離が短く、土に浸み込むことが少ないので、水不足になりやすいのです。その水不足を解消するために、江戸時代から、ため池が作られました。県内には、一万五千ヶ所ものため池があるそうです。

夏休みに帰省すると、水不足の情報をよく聞きます。祖父によると、水不足がひどい年には、時間を決めて、水を止める「断水」をすることもあったそうです。そうになると、「断水」の時間中には、トイレにも行けないし、食事を作ることができず、レストランなど、多くの商売にも、支障がでてしまいます。水がない生活は、本当に困ります。祖父が言うには、何よりも困るのは、米や野菜などの農作物の栽培に影響がでることだそうです。

香川の実家の前にも「かりまた池」というため池があります。祖父は、数年前に水利組合の役員をしていたそうで、重要な仕事の一つに、農作物の育ち具合や天気予報を見ながら、池の水位を調節するということがありました。水位が異常に下がれば、付近一帯の田んぼや畑に、十分な水を入れることができずに、その年の作物に、大きな被害を与えることになるのです。だから、いつも池の水位を気にしていたそうです。私の大好物の讃岐うどんも、こうしてため池があるおかげで、おいしい小麦ができ、うどんが作られ、名物となったようです。

また、香川の水源は、高知県にある、「四国のいのち」と呼ばれている

早明浦ダムですが、以前は、夏場になるとたびたび渇水になり、ダムの底に沈んでいた旧村役場が、姿を現したこともあります。なので、香川では、夏になると、テレビの天気予報などで、早明浦ダムの貯水量が表示されます。この早明浦ダムから、水を引くために作られたのが、香川用水で、昭和五十三年に完成しました。この香川用水は、高知県の早明浦ダムに貯えられた水を、徳島県の池田ダムに入れることにより、香川県に入ってくるので、両県からの理解と協力による「友情の水」とされ、県民の命の水となりました。最近はそのほど深刻な水不足ではないようですが、香川ではいつもそういう深刻な水不足を想定した取り組みがなされています。

このように、祖父の話や、香川の水源について知ると、香川において「水」は、千葉に住む私たちよりも、はるかに大切に思われ、昔からいろいろな努力がされてきたことが、わかりました。また、他県との協力あつての「いのちの水」なので、「水」に対する感謝の気持ちも感じることができました。

香川の水事情を知って、私にできることはまず、普段から、こまめに蛇口を止めたり、シャワーを出しっぱなしにしないなど、「節水」を心がけることだと思います。そして、当たり前前に「水」が出てくるのではなく、もし「水」が出てこなければどうなるんだろう、と想像し、感謝の気持ちを持ちながら、大切に使うことが重要だと思います。

入選

目に見えない水の恵み

神奈川県 洗足学園中学校 1年 三浦 碧美

私は「水」と聞いた時、飲み水やお風呂、トイレの水など、「目に見えない水」を思い浮かべます。しかし、私たちの身近にある水はそれだけではないそうです。以前に、環境と水について書かれた本を読む機会がありました。そこで「バーチャルウォーター」という考え方を知り、とても興味をもちました。バーチャルウォーターとは、食料をつくるのに必要な水を世界的な規模で考えるためのものです。日本のように、食料自給率が低く、海外からの輸入品が多い、ということは、間接的にその輸入品を育てる水も大量に輸入している、ということになります。私はこの考え方を知った時、「これを考え出した人はすごいな。でも、具体的にはどれくらいの水の量なのだろう」と疑問をもちました。

バーチャルウォーターの考え方では、牛肉一五〇グラムを摂取するために、牛を育てるための水や、飼料を育てるための水など、すべてを合わせると三〇九〇リットルの水が必要です。また、パン一斤を作るためには、原材料の小麦粉は約二五〇グラム必要です。その小麦粉を作るためには、二六二リットルの水が必要になります。日本は、台風や梅雨によって、世界の中でも降水量が多い国です。そのため、水が豊富だと感じますが、バーチャルウォーターの考え方では、日本は水を海外に依存している、ということがよく分かりました。だから、食物をつくるのに、多くの水が使われていることを知り、食べ物を残さずに感謝していただくということが、とても大切だと思います。

私は小学校三年生の時、ベランダできゅうりを育てました。その時は、朝、夕それぞれ二リットルずつ、合わせて四リットルの水を約二ヶ月間与えました。すると、種をまいてから実がなるまで四×六二＝二四八リットルの水を消費していたことになりました。この時、きゅうりの実は五、六本なっただけでした。農家で育てれば同じ量の水でも、もっとたくさんきゅうりができたかもしれせん。でも、野菜を育てるのに、

これほど大量の水が必要であることが分かり、とてもおどろきました。もう一つ、バーチャルウォーターを実感できる数値があります。私のお昼のお弁当のおかずをバーチャルウォーターに換算して考えてみるのです。もし、お弁当のおかずが、ご飯一杯、ぬか漬けきゅうり三分の一本、卵焼きの卵一個、きんぴらごぼうのごぼう一〇分の一本、にんじん六分の一本、そしてオレンジ三分の一個分だと考えると、バーチャルウォーターは、八八一・七リットルにもなるのです。そして、人間が一日に必要なとする飲み水としての水は約二リットル。私たちの生活はすべて水に支えられているのだと感じました。

このように、私たちは「目に見える水」以外にも「目に見えない水」つまり、バーチャルウォーターを大量に消費しているのです。経済が貧しい発展途上の国々では、国を豊かにするために先進国に輸出するために食料を育てます。そして、それに水を使いすぎてしまうと自国の人々の食べる食料を育てる水が不足してしまう、という事態になると心配されています。私はまず、これらのことを多くの人に知ってもらうことがとても重要だと思いました。そのためにはまず、食物のパックや袋に書かれている成分表示表に、バーチャルウォーターについての記載をするとうれしいと思います。そうすれば、多くの人がバーチャルウォーターに関心を持つと思います。「目に見える水」を節約することももちろん大切ですが、それと同時に好き嫌いをせずに、食べ物をありがたいただき、食べ残しをしないことが大切だと強く思います。さらに、それが水の恵みに感謝することにつながると 생각합니다。

入選

富山県で節水は必要なの？

富山県 高岡市立芳野中学校 二年 林 えり

「何しとんがけ。水もつたいないから、止めんかいね。」
朝、歯磨きをしている時、母が蛇口の水を出しっぱなしになっているのを見て、私を叱りつけました。油断して蛇口を閉め忘れただけなのに、厳しい口調に朝から気分が悪くなりました。そもそも水はどれだけ使っても（水道代はともかく）水自体は消えてしまわないのに。

理科で、水は、自然のなかで形を変えながら、循環していると習いました。雪や雨となって地表に降った水は、川を通じて海に流れ出て、蒸発して雲となって、雪や雨を降らせませす。地球上の水は、殆どが海水で、人が飲む水や食料・工場で使用できる淡水は少ないけれど、減ることはありません。地球の水は宇宙に逃げ出すことはなく、水をどれだけ使っても、水はなくなるらないので、節水は不要かもしれません。

しかし社会で、地球の人口が爆発的に増えていることも習いました。使用できる淡水を増やすことは難しいのに、地球の人口は2030年に2割以上増えるそうです。将来、一人当たりの使える水の量は、世界的に不足することが予想されます。やっぱり、節水は必要なのかもしれません。

もう少し考えてみることにしました。世界的な水不足は予想されるけど、日本や富山県はどうなるのでしょうか。インターネットで調べると、日本の人口は、2030年には現在より1割減少するそうです。国内でも地域によって人口の変化はバラついていて、東京の人口は増えるそうですが、富山県の人口は1〜2割減少しそうです。また、富山県から工場が海外へ移転する動きがあります。TPPによって外国の農作物の輸入が増えて、富山県の農作物が減少する可能性もあります。その場合、更に水の必要量が減っていくでしょう。世界的には水不足でも、富山県では水不足は予想されません。富山県の水を外国や東京に運ぶことはできないし、やっぱり富山県では節水は不要なのでしょうか。

夕食後、食器を洗いました。大量の泡と油汚れ等が、排水溝に吸い込まれていきます。小学4年生の時に、下水処理場を見学に行ったことを思い出しました。酷い臭いで、家庭の台所やトイレなどで汚れた水を、川へ戻す前に汚物を取り除く処理をしていました。蛇口から出た時は、綺麗で美味しい水だったはずなのに、家庭で使用した後は、汚水になってしまいます。飲み水や料理に使う水は一部ですが、体内を通過した後は汚水になります。殆どの水は食器洗い、掃除、洗濯、お風呂などの汚れを落とすために使われて、自然界にはない洗剤等も加わった汚水になります。健康で衛生的な生活のため水を使うことで、家庭外には汚水を排出しています。

水は循環していて、消えてなくなりません。水が豊富な富山県では、将来においても水は豊かでしょう。でも、節水は必要です。それは、水を使うということは、水を汚すということになるからです。節水は、水の量への対応ではなく、水の質への対応です。

私の家の近くには、富山県七大河川の庄川が流れています。晴れた空の下で見る川の流れは、水面がキラキラと輝き、宝石のようです。川からはサケやマスが獲れます。川の水を使った田んぼから、美味しいコシヒカリが穫れます。これらを使った鱒寿司は名産です。また庄川から流れ出た富山湾の水は魚の宝庫です。特に、ぶり、ほたるいか、白えび等が名産で、大好物です。これらは、富山の綺麗な水の恵みです。健康で衛生的な生活に水は大切に使い、無駄な水をできるだけ使わないよう節水することで、富山の綺麗な水の恵みを守り続けなければなりません。

朝叱られたことが、ようやく自分のなかで腑に落ちてきました。節水をしよう。

入選

水紛争について考える

富山県 高岡市立高陵中学校 二年 三邊 幸奈

一年生の終わりのころ、私は社会でアフリカ州について学んだ。アフリカ州には、エジプト文明が起こり、世界一の長さを持つナイル川がある。十一カ国もの国を流れている国際河川であり、砂漠の多いアフリカにとって重要な財産である。そんなナイル川で紛争が起きていると社会の先生は言った。黒板には書かれない、教科書にもものっていない、メモ程度の話だ。しかし、私は聞きのがさなかった。授業が終わってから、掃除中も部活中も夕食中もずっと夜ねるときも何度も何度も頭の中を考えさせていた。

「ナイル川で紛争」

なぜなのか。お父さんに聞いてみた。するとお父さんは言った。

「セラゲルディン元世界銀行副総裁は、知つとるけん。その人は、二十世紀は領土紛争の時代だったが、二十一世紀は水紛争の時代になるだろうと言った人だよ。ナイル川も水が貴重なために水の奪い合いが起ころんだらうね。」

と。私は、びっくりした。水をめぐる争いがこの地球上で起きていることに。続けてお母さんも言った。

「日本は、関係ないなんて思っちゃだめだからね。」

いまいち意味が分からなかった。なぜなら日本は周りを海で囲まれている島国であり、雨も多く、他の国のことを気にしなくてもいいと考えていたからだ。しかし、次のお母さんの言葉を聞いてはつとした。

「日本は、他の国からたくさんのお母さんの水や食料を輸入しているじゃん。」

そうか、日本は水を全て自給できる訳でなく水ももらい、食料をつくるのに使う水ももらっているんだと、申し訳なくなり、関係ないと思っていた自分にとっても腹がたった。

そして、少しずつ水紛争について調べることにした。世界には、およそ二百五十本もの国際河川があるそうだ。また、国際河川が流れる国は

およそ百四十カ国あるそうだ。ここ数年水をめぐる事態がものすごく深刻になっていくそうさ。水紛争は、そもそも水がない、または水が汚れていることによることから起きる。水がないがために命を失うことは、おおいにある。実際、世界では十億人以上の人々が私たちのように安全な水を手に入れることができていない。日本は、他の国の水を使わせてもらっているのに、使われている国の人々は安全な水さえ手に入れないとができない。私は、あまりにも悲しくて安全な水を手に入れられない人々の苦しみが目に見え、胸がいっぱいになった。みなさんは、どう受けとめるか。どう考えるか。どう変えていくか。水紛争という深刻な事態のある裏で水を出しっぱなしにしていること。必要以上に水を使うこと。

私なら、まず水紛争について理解を深め、今後、日本は解決に向け、役割をにない努力しなければならぬと考える。

日本が他の国の貴重な水を頂いていることに感謝して、食べたり飲んだりしたい。世界で水紛争があることを忘れず水の大切さを理解したい。生きていく上で水はなくてはならないものであり、日本はそのありがたみに気づいていない。全て日本の水ではなく、他の国の水、ましてや水紛争の起ころる決して豊かと言えない地域の水ももらっている。そんな事情を知らない人がたくさんいる。もっと、水紛争について知り、一人一人が意識をもって、水を大切に使うてほしい。

もしも、水紛争を知らなかったら、無関係だと思いきんでいたら、私たちは水を無だに使い、世界の人々の命を奪うことになるだろう。

二十一世紀の今、水紛争の時代をくい止め、水を大切にする時代、平和な時代にしなければならぬのではないだろうか。

入選

緑の山を守るために

山梨県 山梨大学教育人間科学部附属中学校 三年 小平 守莉

「山の自然が水を作る」

木々の葉が風に揺れザワザワと音をたてる。曾祖父が植えた杉の木が太陽を掴もうと大地に根を張り高く高く枝を伸ばす。木漏れ日に目を細めながら僕は誓った、「この緑の山を守っていく」ことを。

「ほら、もう少しがんばれ。」

父に手をひかれ辿りついたのは祖父の山の中腹にある小さな沢だった。「うわ。」

木漏れ日で水面はキラキラと輝き、頬をなでる風はどこか涼しく感じた。

「すごい、これが川の生まれた場所なの？」

岩の下からこんこんと湧き出る水は小さな沢となり山を流れていく。

「この水は、この山の自然が作ったものなんだよ。」

小学校低学年だった僕は父の言葉の本当の意味もわからぬまま、目の前を流れる沢の美しさにただ見とれていただけだった。

「この水はこの山の自然が作ったもの」、父の言葉の本当の意味を知ったのは昨年の夏のことだ。うっそうと茂る草をかきわけながら久しぶりに祖父の山を歩いた。小学生の頃より山は暗く、どこか静かに感じた。

「あれ？たしかこの辺じゃなかったかな。」

父が辺りを見渡す。祖父が体調を崩してから、山は放置されたままだった。離れて暮らす僕達に山の管理などできるわけもなく何年も経ってしまった。

「これじゃ、水が枯れるのも仕方ないか。」

父の手には腐葉しきれていない朽ち葉が何枚ものっていた。朽ち葉と水が枯れてしまったことにどのような関係があるのかわからなかった僕に、

「山の土とコンポストの土を比べてらん。」

父は、そう指示した。

持ち帰った山の土と家のコンポストの土は一見何の違いもないように見えた。しかし水の保水力を調べる実験で両者の差は明らかとなった。その方法としてペットボトルの底に水が抜ける穴をあけ、同じ体積の山の土、コンポストの土、砂をそれぞれ入れ、同量の水を入れ抜けた水の量を比べた。抜けた水の量が少ないほど保水力が高いことがわかる。その結果、コンポストの土、山の土、砂の順であることがわかった。

腐葉しているか否かで保水力に差があることに僕は驚いた。自然の山の土が、人の手をかりて作ったコンポストの土に劣るわけがないと思っていたからだ。そこで僕は思い出した。小学生の頃登った山と比べ、今回の山はどこか暗く静かに感じた。きれいな沢があった頃、祖父はひまをみつけては木の枝を落とし、時には伐採し山を管理し守ってきた。僕が自然だと思っていた山の姿は祖父が手をかけ守ってきたものだったのだ。

「山の自然が水を作る」

かつて山は人々の生活と密接なものだった。人々は山の自然の恵みを与えるかわりに、山を守り管理してきた。緑の山、それは命の源である水が生まれる場所であり命を育む場所だったのだ。

蛇口をひねればいつでも水が飲める環境で育った僕達はいち忘れてしまふ。水は自然の恵みであり、大切な資源だということを。そしてその自然は僕達一人一人が守っていかななくてはいけないことを。

「また来るからね。」

少し明るくなった山に別れを告げ、落とした枝を両手に抱える、かつてここに沢があったことを示すものは何もない。でも僕はあきらめず祖父が守ってくれたこの山を守っていく、いつの日か、あの美しい沢に会えると信じて。

入選

川はやすらぎ

静岡県 静岡市立清水第八中学校 三年 飯田 祐大

好きな川は？と聞かれたら、吾平川と巴川と即答します。

僕は、夏休み、毎年のように鹿兒島へ行きます。母親の実家は吾平という見渡す限り山や田畑が広がるのどかな田舎です。祖父は、山からイノシシ、海から魚やタコ・伊勢エビ、川からはウナギも捕ってきます。家の近くを流れる吾平川で、祖父や従兄弟と過ごす時間が僕は大好きです。

魚やカニを横目に、水のように身体が透き通る感覚の素潜り。青葉の山に響き渡るヒグラシの鳴き声と小鳥のさえずりを聞きながら釣り糸を見つめるゆつたりとした時間。母は田舎は不便だと言いますが、吾平川は貴重な遊び場です。

清水の入江地区に住む僕にとつて最も身近な川は巴川です。アニメ「ちびまる子ちゃん」にもよく出てきます。家から徒歩数分の所に流れています。夏には花火大会・灯ろう流しがあり、地域の人たちは、家族みんなで参加します。

港祭りの最終日、夜空の花火と川面に映る花火の共演は迫力満点です。団扇をおおぎながら花火を見つめる家族の横顔を今年も見ることができるとしよう。

灯ろう流しは、ご先祖の魂が灯ろうに乗って海のかなたのあの世に帰っていくという信仰に基づいています。静かな水面をゆっくり流れる無数の灯ろうは幻想的です。会ったことのない曾祖母たちと心つながるひとときです。

公害が騒がれていた昔、巴川でも環境悪化のために、この行事は昭和四十八年から中止になりました。しかし、地元の強い要望と、環境面の対策が整ったので昭和五十九年に復活しました。川の水質改善に真剣に取り組んだおかげでもあります。ごみにならないよう灯ろうを回収する工夫をしていることも知りました。亡き祖先を思い、家内安全や無病息災の願いをこめる灯ろう流しは、人々の心のよりどころになっているの

です。

しかし、時にお菓子の袋などが浮いているのを見かけると、悲しくなります。わざと捨てたのではないと思いたいのですが…。川は人間だけのものではありません。川をきれいに保つことは、人間の義務だといえます。僕たちはどうしたらよいのでしょうか。

一つは、森林の保護です。森林には、水をためる役割、栄養のある土を作る役割、空気をきれいにする役割などたくさん役割があります。その中で特に興味深いのは、水をきれいにする役割です。雨水や雪解け水を柔らかい地面に浸透させ、ろ過し、その過程でさまざまな養分を溶かし込むことで、川にきれいな水を安定的に供給しているのです。今後、機会があれば植林などの保護活動には是非参加したいです。また、今では普及している再生紙を利用したトイレットペーパーの使用や、新聞紙・段ボールの古紙回収も森林の保護につながっています。

他にも、川をきれいにするためにできることは、生活排水への配慮です。食器に着いた油や汚れはぼろ布や新聞紙でまず拭き取ってから洗うことで台所排水は改善されます。台所・洗濯用洗剤の量を減らすことも大事です。これらは僕の家でも実践しています。

一人の力では小さなことかもしれませんが、多くの人々が意識して継続していけば、川は必ずきれいになると思います。

きれいな川を見ると心がやすらぎます。決して絶えることのない水の流れは、まるで過去から未来へと続く人間の命のつながりのようです。川は、家族やそこに生きる人々の絆を深めてくれます。また、生き物たちの命の営みは悠久の自然を教えてください。巴川のおかげで、静岡への愛着がますます強まり、「自慢のわがまち」となりました。吾平川も巴川もどちらも大好きな自慢の川です。

入選

水に対する私の想い

静岡県 静岡市立蒲原中学校 一年 大津 亜矢香

「ブノン・ペンの水道水は飲めるんだぞ。」

カンボジア出張から帰ってきた父が私に教えてくれました。父の言葉に私はおどろきました。

私は水に関して人より少し強い想いがあります。それは、私が小学一年生の九月から小学五年生の終わりまで、中国、蘇州に家族と住んでいたからです。

中国、蘇州は東洋のベニスと言われ、町中に河が縦横無尽に流れていて、今でも物の運ばん手段として船が使われています。

ここまで書くと風光明媚な町の様子が思いうかべられますが、私の目に実映った蘇州の河は深緑色をし、河の中はさまざまなゴミが浮いていました。まるでゴミ捨て場のような河の印象を受けました。清らかな富士川や駿河湾に囲まれて育った私にとっては、蘇州の河が悲しく見えました。

中国、蘇州の水道水を飲むことはしません。砂が混じった水や、赤色のサビが混じった水、藻が混じった水が出てくるからです。

だから飲み水は、大きなタンクのミネラルウォーターを買っていました。しかし、その飲み水は一度わかしてから飲んでいました。心から安心して飲める水はありませんでした。こんなに、不慣れた生活を送っている、中国の人は、大変だと思いました。

そんな生活を中国で送っていたので、滞在期間を終えての本帰国後は日本の安心して飲める水道水と自然の海や河の水の美しさに感激しました。

中国の水事情を知っていた私にとっては、日本以外の国、取り分け途上国の水道事情については、発展していないと勝手に思い込んでいました。

だから、カンボジア出張から帰って来た父の一言におどろかされました。父の一言が気になって少しインターネットで調べてみると、福岡県北九

州市の水道局が十年以上も前から国際協力の一環で、カンボジア・ブノン・ペンの水道事業支援を行っていることが分かりました。

素直に「嬉しい。」と感じました。

カンボジアの人々の役に立ち、日本の技術が伝わり、その人達の生活が豊かになっているからです。

日本人であることをほこりに思いました。

しかし、水道技術の支援だけでは、私は足りないと思います。その場所に住む一人一人の水に対する意識を変えなければ、海や河を美しく保つことはできないと感じているからです。

海や河にゴミを捨てる人は、「みんなしているから自分もする。」という意識が強いように感じます。でも、この考え方が減れば自然の水をよごさなくて済むと信じています。

日本は、どの国よりも水資源にめぐまれ自然を大切にす国です。これは、長い歴史の中で日本人が水の大切さを文化として学んできたからだだと思います。これから私はもっと日本の水資源の勉強に関わっていきたいです。それは、海外の人達に水資源の大切さ、尊さを私の言葉で発信していきたいと思っただからです。

そして、世界の人達が日本の技術で作った水道水を安心して飲める日が、いつか来ることを私は願っています。

入選

水の声を聞け

「その水は飲んじやだめだ！」

僕は春休みに柔道部の仲間とともに地元で一番高い石巻山(標高388m)に登りました。その中腹にある御堂の脇に湧水が流れ、喉が渴いた友人は湧水で手を洗い、水を飲むうとしていました。僕があわてて止めた理由は、以前父と山に登った時、父が飲んで腹を下した湧水だったからです。一見きれいな見える水でも実は汚染されている危険があるという事を考えさせられた出来事でした。そしてテレビ番組で見た、水を求めて家から数十キロも離れた川へ汚染された水を汲みにゆき、それを飲み水にしている発展途上国の子ども達を思い出しました。その水は父や友達に飲んだ水よりさらに濁り汚染されているため、多くの子どもや大人の命を奪っているそうです。僕はそんな環境の下に生まれなくてよかったと感じていました。

石巻山から家に帰って来て母に、「水道から直接水が飲める幸せを実感したよ」と話したら、「うちも水道の水は、そのまま飲んでないよ」と思いがけない返事。僕はつきり水道水を直接飲んでいると思っていたので驚きました。「この辺りは昔から水不足に悩まされて、毎年夏になると水道(水)のカルキがきつくなるの。そのまま飲んでも大丈夫だけど、よりおいしく飲むために浄水機を取り付けたのよ」と、東三河の水事情について話してくれました。

そう言えばスーパーでもいろいろな名のついた水が2L100円〜200円で売られているのを見たことがあり、ジュースと同等な値段がつけられているのを思い出しました。もはやきれいな水はお金で買う時代であり、水道水も使用料金を払っているため、水はタダとは言えないのです。しかし使う水の量に対して払う金額が少ないために水をタダだと勘違いしている人が多いのです。特に日本は水に恵まれ過ぎていて水の有難さを忘れていきます。

愛知県 豊橋市立南部中学校 三年 仲川 晴斐

4月韓国で第7回世界水フォーラムが開催され、アジア太平洋地域はアフリカを下回り、世界一水不足・水危機に直面していると報告されました。近隣諸国や外国の企業は以前から水の大切さに逸早く気づき、日本のきれいな水に目を向け、水源を持つ森林を買い漁っています。それに危機を感じた日本は対抗措置として、森林を買収されても水の使用权は認めないという法律を検討しました。次世代を担う僕たちも「日本の水」の大切さに気づいて守っていかねばなりません。

そこで今僕のできることをして、家族の協力を得ながら雨水利用や風呂の残り湯を洗濯や花壇の水撒きに使ったり、水を出しっ放しにしないなどの節水に心がけています。また個人的には市内を流れている豊川(一級河川)の支流の清掃活動に参加しています。そして学校全体の取り組みとして、豊橋南部中学校の校区内にある農業用ため池のなまず池の清掃にボランティアとして参加しています。水質保全と環境美化の活動を十一年以上(2001〜)続けたことによりその業績を認められ、当校は今年度ユネスコスクールに登録されました。もちろん僕も先輩方の功績を引き継ぎ、現在生徒会長として率先してなまず池の清掃活動に参加しています。夏休みには生徒会サミットが開催され、市内中学の生徒会が一堂に会します。そこで僕は当校のボランティア活動を報告し、水の大切さについて語ろうと思っています。そしてその取り組みを理解してもらい、全中学に活動を広げていくつもりです。

今、川は叫び水は泣いています。その叫びを聞きながら何も行動に移さないのであれば、それは意味の無い事になってしまいます。一人一人が水の声を聞き、生命に必要不可欠である有限資源「水」に目を向け、生活の利便さを最優先したことによって汚してしまったことを反省し、過去から引き継いだ大切な遺産を未来へつなげていかなければなりません。

入選

水を考える

愛知県 常滑市立南陵中学校 三年 久野 美裕

水は大切。では私たちは水とどのように関わってゆくべきでしょうか。この作文をきっかけに初めて真剣にそう考えるようになりました。

地球上にある水のうち、人類が使うことのできる水は0.01%（約0.001億km³）しかないそうです。私はそんなに少ないのかと驚きました。そのうち約70%が農業に、約20%が工業に使われ、私たちが使うことができるのはごくわずかなのです。

日本は幸い、水が豊かです。いつでも、好きなタイミングできれいな水を飲んだり、使ったりすることができません。そのため、多くの人々が水の存在を当たり前と感じすぎてしまい、結果的にポイ捨てなど水を汚す行為を何の気なしにってしまう人が出てきているのです。

では、世界に目を向けてみるとどうでしょうか。実は世界には、深刻な水不足に悩んでいる国が数多く存在しています。世界保健機構（WHO）によると、人口急増や社会発展などにより安全な飲料水を確保することができない人が世界には約12億人もいるそうです。つまり、「水」はすでに世界共通の問題となってしまっています。この事実、なかなか聞き捨てなりません。なぜなら、安全な水が飲めるかどうか、ということは人間の健康に大きな影響を及ぼすからです。

人体においては体重のおよそ60%を水が占めています。この体液が生命の維持・活動に重要な役割を果たすのです。不衛生な水を飲むと、コレラ、腸チフス、赤痢など、命を落とす危険性がある病気にかかることがあります。そして、これらの病気は周りに感染する恐ろしい病なのです。体力の弱い乳幼児の場合、不衛生な水を摂るとしばしばひどい下痢を起し、脱水症状で死亡してしまったり、老人の場合では免疫が弱く命を落とすケースも起こりかねません。また、不衛生な水は寄生虫の問題も引き起こします。日々、汚れた水が原因と考えられる病気で、子どもたちが8秒に1人ずつ死亡していると言われているのが今の世界に

おける現状なのです。

だからこそ、もっともつと自分の生まれてきた環境に私たち日本人は感謝しなくてははいけません。そして、水の存在はもちろん、ダムを作ってくれた人、水を送ってくれている人、水をきれいに保ってくれている人たちのたたらきと、ダムのある町や村の人々の理解と協力があってこそということをおぼえてはいけません。

ぜひ、これまでの自分を振り返ったとき、川にゴミを捨てていたり、水や周りの環境を大切にできていなかったのなら、水のことを知り感謝の気持ちを持つて少しづつ改めていってもらいたいです。地球上の水は使われながらぐるぐる回っています。人類が水を汚せば、やがて必ず自分に返ってくるでしょう。それなら、陸なら汚してもいいんじゃないかと思う人もいるかもしれません。ですが、陸が汚れば水も汚れます。つまり、水を大切にするということは地球を大切にすること、に直結しているのです。そのことを忘れないで下さい。普段は水について考えることはあまりないけれど、毎年、365日中の1日くらいはせつかく8月1日が水の日なので、皆がきちんと水について考えてくれる日になったらと思います。

そしたらどうでしょう。皆が水について考え、少しでも気を付けるようになったら。おかげで誰かの命が助かるかもしれません。もしくは、未来の子孫たちがより安心して暮らせるようになるかもしれません。たった1人だったとしても、それが一度も会ったことのない人でも、少しづつ気をつけることでその人の笑顔が生まれると思うと、水について考えるということが、なかなか素敵なおことのように感じませんか。

入選

きれいな水、やさしい水であるために

滋賀県 滋賀県立河瀬中学校 三年 宇野 ひかり

滋賀の新しいお米「みずかがみ」。

私は、先日このお米を食べさせてもらった。祖父が作るお米もおいしけれど、このお米もとてもおいしかった。どのような違いがあるのだろうかと思ひ調べてみた。どちらも水のこと環境のことを考えて作られた「環境こだわり米」であることを知った。ただ「みずかがみ」は、より滋賀の地に適したお米として開発された新しい品種のお米だった。しかし、どちらも農薬・化学肥料が通常の半分以下、泥水を流さないなど環境にやさしい技術で栽培されている。私の住んでいる所は、田んぼが多く、今やそのほとんどが環境こだわり米を作っておられる。そして自治会には環境保全隊なるものが結成されている。環境保全隊の活動は、主に濁水防止、排水路管理を地域の人と一緒に自然環境に配慮し取り組むことだ。田んぼの側溝の割れやひびをみんなで点検し、補修したり、用水路にたまった土砂を取り除く時は住民総出で行ったりしている。私も、子供会のみんなと田んぼの土手にヒメイワダレソウという草を植えたことがある。その時は何も知らずに植えていたけれど、後からこの草はあぜに除草剤をまかずに、雑草を抑える効果があることを知った。除草剤をまくと雨で田んぼや川に薬が流れることもある。それを少しでも無くすために、この草は水と景観を守り、除草作業の手間も省くことができる。

また、このような活動は、さまざまな所で行われていた。その一つに、「魚のゆりかご水田」というのがあるのを知った。琵琶湖と田んぼを繋いでいる排水路を昔のように、魚達が行き来できる排水路にする取り組みだ。田んぼはフナやナマズなどの在来魚達にとっては絶好の産卵場所となり、魚達にもやさしい水で作られたお米は「魚のゆりかご水田」として販売されている。まさに一石二鳥の取り組みである。今まで何度も通っていた湖岸道路沿い、私は調べてみて初めて「魚のゆりかご水田」

と書かれた立て札が何か所もあるのに気づかされた。

私たち滋賀県民は全国一の湖を持ち、水との関わりが深い。小学生の時には「山の子」で、水の生まれでる経緯を知った。「フローティングスクール」では山から流れて来た水が琵琶湖に流れ着くまでや、川に住む魚や植物に私達の行動がどのような影響を与えてきたかを学んだ。けれども、中学生になった私は、小学生の時と比べて水に関わる環境に関心が薄れてきていると感じる。それは大人も同じだと思う。平気で川にゴミを捨てたり、琵琶湖に外来魚を放したりする。滋賀県民は水が豊富にあることを自慢の一つとしている。でも、同じ自慢するなら、どこにも負けないきれいな水が琵琶湖にあるからだと言いたい。そうでなければいけないのではないだろうか。この水は私達だけの水ではなく、そこに住む魚や植物、そして他府県の人達の暮らしをも支えているのだから。

今、私達はもっともつと水や琵琶湖や環境に関心を持つ事が必要だと思ふ。身近なところで行われている環境への取り組みの意味を知りたいと思う。環境こだわり米とは？魚のゆりかご水田って何？このように疑問に思うことから、調べ、調査することで関わり、今の水の現状や環境を見直すきっかけを作ることとはとても大切だと思う。私達中学生も積極的に関わり、中学生ならではの意見や考えを広く地域や県、他府県へも発信していけるようになりたい。

私達の生活になくはならない水がきれいな水、やさしい水であるために、私達が担う役割はとても重要である。でも、それは川にゴミを投げ入れない、こだわり米を食べるなど、小さなことからでも関心を持つてさえすれば、決して難しいことではないということを私は全ての人に言いたい。

入選

水

小学生三年生の夏休みのことだった。お盆で特に予定がなかったので起床時間は遅めであった。目覚めたときは、既に両親は仕事で家を出た後だった。

「あれ？水が出ない」

顔を洗おうと思っただけで蛇口から水は一滴も出てこなかった。キッチンのお風呂の水もやっぱり出てこない。寝ぼけていた僕でさえ一瞬で目が覚めた。

同時に僕の頭の中に様々な不安が過ぎる。トイレに行きたい。でも流す水は？歯磨きは？お風呂はどうするの？洗濯は？

「そういえば母が（水が出なかつたら外の水道へ行きなさい）と言っていた様な気がした。何で外なんだろう。とブツブツ言いながら階段を下りた。そこで外の水道の前にある社宅の掲示板が目があった。そこには「貯水タンクの修理のため、九時～十七時まで水が出なくなります」と書いてあった。

「なんだ、よかつた。たつたの半日だ」

その時、僕は半日の水無し生活を軽く考えていた。外の水道が使えるならバケツに汲んでくればいいやという考えはどこに行ったのか。

ところが、歯磨きをしたり、洗顔をしたり食器を洗ったりと意外に普段の生活に水を要することに気がついた。バケツを片手に半日で自宅の二階まで階段を何往復もした。修理が済み、蛇口からきれいな水が出るまで沢山の水を流した。水無し生活を甘く見ていた自分の考えに失望した。

「水を大切にしましょう。」生まれてから何回聞いたことか、聞き飽きたぐらいだ。もちろん、分かつたつもりでいた。だが、頭の中で分かつていても実際困って見ないと本当の水の有難さに気付いていなかったことをしみじみと感じた。バケツを運んでいるとき、僕は自分自身がかかす水に対して無神経だったかと思ひ知った。食器洗いで水を出し過

京都府 京都学園中学校 三年 吉田 明仁

きたこと、スイミングのシャワーで遊んだこと。それらの無駄にしてしまった水のことを思い出し、後悔した。

最近、水の大切さについて改めて考え直した。水は雨が地面にしみ込み地下水となることで生まれる。地下水は川へと流れ込み、人の手で浄化処理されたものが私たちの家庭に届けられる。日本は海や川などの水質資源に恵まれているため、日本人はそれをごく当たり前のこととして捉えている。しかし、何日もかけて遠くから水を運び生活している国の存在や、水不足のニュースを聞くと「水のある生活」は決して当たり前ではないことを気づかされる。むしろ、水は高価なブランド品にも勝る価値があるのではないかと思える。

あの夏、ほんの半日であったが、私は「水のない生活」の体験を通して、身近な存在であった水の大切さに気付くことができた。いつでも水が近くにあるなんて思っただけではない。そう実感して以来、水の使い方を考えるようになった。家では、流すにはもったいない食器や洗濯のすすぎ水は、ペットボトルやバケツに入れておき、植木や家庭菜園、打ち水などに利用している。少し気をつけるだけで、水の無駄使いをせずに済む。節水することで、逆に心は豊かになるような充実感も覚えた。これからは家だけではなく、学校でも節水を積極的に行っていきたい。

人は、高価なもの、珍しいものに価値があると思ってしまう。そして、本当に価値があるものは、実は当たり前だと思っただけの中にも潜んでいるのかもしれない。それを採るのは決して難しいことではない。「水は大切です」そんな聞きなれた言葉の意味を改めて噛み締められたのは、夏の出来事のおかげだった。

入選

目指すは、水ビジネス、3K

大阪府

大阪教育大学附属池田中学校 二年 上田 萌加

ある日、私は新聞で水ビジネスについての記事を読みました。ポリグルタミン酸で海外の不衛生な水を浄化する設備を作っているのです。メリットは三つありました。まず、川からホースで水を引くため子どもが危険な水汲みをする必要がないことです。次に、簡単な設備できれいな水を飲め、そして、安いことです。具体的には、水リットルを浄化するために、日本円でたったの三円しかかりません。

私はこれを知って、安さが一番の魅力だと考えました。例えば、ポリグルタミン酸は、納豆菌や枯草菌を発酵させて作ったネバネバを集め、冷凍乾燥させて取り出すため、コストをおさえることができるのだと思います。

水道水を当たり前に飲める日本。それに対して海外では水道が普及していない場所が多くあります。不衛生のため命を落とす人々がいるのも事実です。私はこのような人々を一人でも多く救いたいと思いました。そのためにはどうすればいいのでしょうか。重要なのは、「簡単」「効率がいい」「コストが低い」水の浄化方法です。私はこの三つを3Kと呼びます。

始めに私が出した結論は、海水を真水に変えることです。海に面している多数の国に役に立てたいのです。確かに、もうすでに日本で取り入れられていて、研究も進んでいます。では、「なぜ普及しないのか？」を考えるとときふと思ったのです。フィルターを使うからコストが高くなるのではないだろうか。そこで、海水で水力発電ができないかと考えました。技術の授業で、水力発電の変換効率の高さを勉強し、効率がいいと思いました。私が考える具体的なプランを説明します。

まず、海からポンプで海水を吸い上げ、高い位置にあるタンクに一度貯めます。そして余っている土地に水力発電の設備を作り、水を勢いよく流して発電し、電力を得ます。水を吸い上げるエネルギーは電力の一

部で賄います。また、電力の大部分で海水を沸騰させ、水蒸気と塩に分けるのです。水蒸気を冷やして真水を得ることができれば、煮沸済みで一石二鳥だと思いませんか？それだけでは終わりません。塩はブランド化して、売ればいいのです。そして、余った電力は電気として使えます。海水をと得られた電力は無駄にはなりません。

これが私が練りに練ったプランです。小規模の設備を各地に作り、一番初めの水を吸い上げる時だけ電力を使えば、エンドレスで水を供給できると考えたのです。

ここまで考えると、たくさんの課題が見えてきました。第一に海に面した地域にしか普及しません。海に面した地域だけでも、まず、普及させられればうれしいです。第二に大雨の時の問題です。第三に生態系の問題です。海水には目には見えないプランクトンや、貝、魚などがいるため、よく考えなければ生態系を壊してしまいます。海で働く漁師や、漁師がとった魚を食べる住民のことまで配慮しなければならぬことに気がきました。世界に数十万から数百万あると言われている無人島の利用もできます。しかし、水を届けるための費用が必要になります。第四に、ソーラーパネルよりも設置費が高いところです。第五に、海水により設備がさびやすいところです。

次に出した結論は、3Kは重要であり、難しいということです。私は自分の発想の可能性を信じ、これらが秘めている力を最大限に引き出し、3Kを実現させる方法を見つけます。ここまで来て、ようやく、冒頭部分のポリグルタミン酸のすばらしさを感じます。

最後に出した結論は私が人々を救う浄水方法を研究しようということです。ここであきらめる訳にはいきません。一生をかけてでも発見し、たくさんの人々に役立てます。海水に限らず、水ビジネスの3Kをこれからも考えます。挑戦し続けます、未来のために！！

入選

水道水は魔法の水ではない

大阪府

大阪教育大学附属池田中学校

一年

佃 知采

私達日本人は、水道水をあたり前のように使っている。では、それができるのは何故か。小さい頃は、雨が降る限り、水は無くならない。だから、水はいくら使ったって良い、という考え方をしていた。だが、今は違う。これにはきちんとした理由があるのだ。

以前、家族で海外旅行へ行った時の事だ。私は喉が渇き、水道水を飲むとうとした。すると、母が、その水は危ないから飲んではいけない、と言い出した。結局私は、水道水が危険、という事に違和感を抱きつつ、訳も分からないまま、市販の水を手にとった。しかし、後で調べてみると、なんと、水道水が飲める国は十数カ国しかない事が判明した。現在日本では、河川から流れてきた水が浄水場へ送られて、沢山の工程を経て、やつときれいで安全な水が作られる。そして、人が使った汚れた水は、雨水と共に下水として処理され、川へ流される。そして、その流された水がまた浄水場へ送られる。このように、水は循環している。そう、これが日本人が水道水を当然のように使える理由だ。このシステムが無ければ、水道水は安全に使えないのだ。逆に、多くの国では、きれいに水が処理されない。また、地球温暖化により、雨の強度や頻度が大きく変化し、水資源が不安定になってしまう。これらが水をそのまま飲めない大きな理由だ。

これは、実際に母から聞いた話だ。母の友人の一人がインドネシアに住んでいた。母はその人の元へ遊びに行った時、あることに驚いたという。なんと、シャワーの色が褐色だったそう。日本のように、どんな所でも透明で、安全な水が蛇口をひねれば出てくる、と思っていた私は、かなり衝撃を受けた。「あたり前」のことが、「あたり前じゃない」と気付かされた瞬間だった。

このように、簡単に水道水を使うことの出来ない国が沢山ある中で、ほとんどの人が水道水をそのまま利用している日本は本当に恵まれてい

る、と改めて感じた。同時に、日本人はもっと、このことに対して感謝の気持ちを持たなければならぬと思った。

では、私達がするべきことは何だろうか。まず、水を大切にすることだ。私もついやってしまうのだが、シャワーや蛇口の水を出しっぱなしにしてしまうことはないだろうか。これはかなりもったいない。だから、必要な時だけ出すことを心がけると良いと思う。そして、水を汚さないことも大切だ。いくら下水処理されているからといって、何でも水に流していけば、処理しきれなくなる場合もある。そして、結果水を汚してしまうことになる。機械に頼ってばかりではなく、自分でも努力することとは必要だと思う。

何にもしなくても蛇口から透明で安全な水道水が永遠に出てくる、そんなのは嘘だ。何もしなければ、汚くて危険な水しか流れてこない。そう、水道水は勝手にきれいになるような、魔法の水じゃない。本当はただの水なのだ。人が汚せばどんどん汚れていくし、人が使わなければただ流れていく。ただそれだけなのだ。しかし、私達は水を毎日沢山使っているのに、蛇口から出てくる水はいつでも澄んでいる。それは何故か。水道水は人の手によって魔法がかけられているからだ、と私は考える。だが、私達が感謝もせずにつつと汚していけば、「魔法の水」になった水道水も、「ただの水」またはそれ以上に逆戻りしてしまうのではないだろうか。水道水を「魔法の水」にするか「ただの水」にするかは、私達が決めることだ。

入選

雨水の利用

兵庫県 西宮市立西宮浜中学校 3年 氏原 新菜

みなさんはこの地球上にある水の量はどれくらい知っていますか。「水の惑星」とも呼ばれるくらいですから膨大な量です。どれくらいかというところ「14億立方キロメートル」です。私はこの数字にただただ圧倒されました。しかし、その9割以上が海水で河川や湖沼など私達が使用している淡水はわずか0.01%です。「14億立方キロメートル」もの水があるのに9割以上も使用することができなくて未だ世界で約9億人の人が飲み水すら確保できていないというのは信じられません。理由は地理的な偏在、水路や浄水設備などが十分に整備できていないからだと思います。私達が住んでいる日本では当たり前のように水を使って生活しています。無駄使いをしようとするとも少なくありません。しかし、世界全体をみると水資源不足が深刻化しているのです。

そこで私は限りある水を今まで以上に大切に使用していきたいと思いました。また、身近にある自然の水を上手に活用できたらいいなと思います。雨水の利用について調べてみました。

まず、雨水を利用するためには雨水を貯めておかななくてはけません。なので、雨水タンクを地上や地下に設置します。雨水タンクとは、屋根に降った雨が樋を伝わって排水されるときに雨水を途中で取水して一時的に貯めておく容器のことでプラスチック系・木質系・金属系などがあります。自治体が主に洪水の抑止として雨水タンクの設置に補助金を出したりもします。その雨水の利用は主に四つあります。一つ目は散水、打ち水への利用です。夏場の熱くなったアスファルトへの打ち水や庭や草木への水やりを利用されま

す。雨水は塩素を含まないので草木にやさしいのでよいと思います。また、打ち水は「打ち水大作戦」で環境への意識を高めながら地域の人と協力してできるので良いと思います。私の住んでいる地域でも夏に打ち水大作戦をしたいなあと思います。二つ目は集中豪雨の一時的貯水への利用です。最近、集中豪雨の影響でとても大きな被害が出ています。被害を少なくするために

雨水タンクを利用して洪水や浸水を防ぐことができます。三つ目は生活用水としての利用です。車の洗車や掃除、洗濯水として使えます。雨水は軟水だから洗剤が溶けやすく泡立ちがよいし、すぎにも最適だから洗濯水として使うのはピッタリだと思います。また、トイレの流し水や風呂の足し水にも利用できます。四つ目は災害時用雑用水としての利用です。地震などの災害が起こった時、飲み水はすぐに支給されますが生活雑用水は支給されません。ですから、貴重な飲み水も生活用に使われてしまいます。でも雨水を利用するとトイレや手洗いなどに飲み水を使用しなくていいので、貴重な飲み水も無駄になりません。

このような雨水の利用が私達を助けてくれているので私達は雨水に感謝しなければならぬと思います。また、私は雨水がこんなにも様々な用途に使えると知ってとても驚きました。雨水タンクを家に設置し利用したいです。そして、世界の国々にも雨水の利用を広めていき、将来水不足で困ることがない世の中であってほしいです。

入選

水資源活用の未来を考える

広島県 広島市立国泰寺中学校 三年 窪田 果琳

「風の匂いが違う。」

それが、屋久島に初めて着いた時の私の印象でした。

私は小学生の時、屋久島のエコツアーに参加しました。島をよく見てみると私の知っている瀬戸内海の島とは大分違います。まず海風がとても強いのに磯の香りがあまりしない事、そして次に植物がとても生い茂っていてその間をたくさんのチョウやトンボ等の昆虫が飛びまわっていました。この美しい自然は絶え間なく降る雨によって育まれています。

屋久島のガイドさんの説明で、島では電力をほぼ100%水力発電で賄っているという事を聞き驚きました。日本では火力発電が一番多いと思っていたからです。

私はなぜ屋久島が多く発電量を水力で得られるのか調べてみる事にしました。

まず屋久島の豊富な水資源がどこからやってくるのかという事です。

屋久島は水の島とも呼ばれるくらいいつも雨が降っています。私が島に居た間も山々を見上げるとどこかに雲がかかっている、雨が降っているのです。降る量もとても多く、窓ガラスにバケツで水をかけているような量の雨が降っていました。

雨が多い理由は島の中心に標高千九百mの宮之浦岳をはじめkmを超す山々に島の周りを流れる暖流の黒潮から水蒸気をたっぷり含んだ空気が駆け上がり冷やされることで水蒸気となりそれが雨雲となって雨を降らせるのです。

屋久島の年平均降水量は一万ミリに達すると言われ、これを利用した水力発電で島民の生活を支えているのです。

さらに、屋久島では水力が生んだ自然エネルギーで走行できCO₂も排出しない電気自動車の普及に取り組んでいました。

それでは屋久島以外の地域での水力発電はどうなのかというと、既に水力発電ができそうな場所にはダムが設置されており現状ではこれ以上は増やせないようです。

そこで、ダム以外の水力発電として小水力発電が注目されています。農業用水路や砂防ダム等の水量がダムほど多くない場所でも水車を回して発電することができのです。

国内では長野県が小水力発電の導入量が一番多く2030年には、太陽光・小水力・バイオマスでの発電を拡大して再生エネルギーでの自給率を100%にする予定なのだそうです。

海外でも小水力発電の開発を進めています。

日本では東日本大震災の福島での原子力発電所の事故以降その対応に追われています。

廃炉する為にでた放射性廃棄物は数万年保管しなければならず、未来の地球の生命への負の遺産になってしまいます。

一方、水は清らかに流れているだけで価値があります。その水を利用して環境を大きく変えないで発電する小水力発電は二酸化炭素の排出も無く危険な排出物も出しません。

さらに今、地球で取り組み始めているのが町おこしからの小水力発電です。

かつてはどの農村でも山の上の方まで田んぼがあり小川には水車が回る里山の風景がありました。そういった場所を再び適地として使う事ができます。

単に電気を発電するだけでなく、設置した事で実際に目で見る事のできる環境学習施設として、多くの人々に水資源の大切さを知ってもらい保全への意識を高める事ができます。

人がこれからの未来も水資源を守って行くために森林の保護、川を汚さないライフスタイルに取り組んで行く必要があります。

小水力発電はコストが高くほかの新エネルギーより普及が遅れています。しかし今後、新たな技術開発が進めば普及が進み、人の自然が共生できる世界、低炭素エネルギー社会への未来が実現できると私は希望を持っています。

入選

踏み出そう、確かな一歩

山口県 山口大学教育学部附属山口中学校 二年 能美 千愛

私は毎日のように両親から怒られる。その中でも一番多いのは、水の出しっぱなしについてだ。私がお風呂から上がると、いつもシャワーが出しっぱなしになっているのだ。そんなだらしのない私に母はいつも「おばあちゃんを見習いなさい。」と言う。

確かに祖母は水をとでも大切に使用している。私の祖母は農家だ。大きな畑でニンジンやキャベツなどたくさんのお作物を育てている。そんな祖母の畑には、大きなドラム缶が置いてある。雨水をためて、水やり用の水に使っているのだ。

私が初めて畑仕事を手伝った時は驚いた。私の家では、花壇やプランターへの水やりは水道水を使っていたので、それが当たり前だと思っていた。雨水を大切に、一滴も無駄にすまいとする祖母の姿に、私は言葉にできない思いを学んだ。まだ小学校低学年だった私には、重いじょうろを抱えて畑中を歩き回ったり、自分よりも背の高いドラム缶によじ登って水をくむことはとてもきつく、苦しかった。思わず、「ホース持ってきて、ホースでやろうよ。」と言った私に祖母は、「何を言ってるの。」と言った。それから諦めて、必死で水をやったのを覚えている。

畑仕事が終わってからも祖母は厳しかった。仕事に使った長靴を洗いに洗い場へ行った。私は水を長靴にかけ流し、ブラシでこすって洗おうとした。すると、祖母にすぐに水を止められてしまった。「もったいないから、たらいに水をためて洗いなさい。」と言うのだ。その時私は自分ももったいないことをしているなどとは少しも思っていなかった。皿洗いなども水を出しっぱなしでやっていたし、顔を洗う時もずっと水が流れているのが当たり前だった。つまり、私は無意識のうちに水を大切に使用していなかったのだ。祖母と私のこの差は何だろうと思う。祖母に昔散々言われていたにも関わらず、私はまだ水の大切さを理解することができていないのだ。

水は米作りにおいても欠かすことのできない重要なものだ。米作りは祖父の担当である。微妙な水量を調節しながら、毎年おいしい米を育てている。そんな祖父の姿からも、日本人が水と密接に関わりあいながら、文化を育て発展させてきたのだということを知ることができる。しかし、私はまだ自覚が足りないのだ。では、どうすれば水への意識を高めることができるのか。それは、水が私たちとどう関わり、どう私たちを支えてくれているのかを知らなければならぬと思う。

まず飲み水。毎日必ず水を飲む。お茶を入れるにも水が必要だ。人間の体は約七〇%水できていて、少しでも不足すると健康を保つことができない。まさに、命の水だ。また、水は物作りに欠かせない。農業、工業にはたくさんのお水が必要だ。農業などに使われる水はきれいなものが良いそうだ。水を汚さないことも大切である。色々な所で使われている水だが、使われすぎて世界での使用量は年々と増えてきているらしい。人口増加も重なり、水不足がおきたり、きれいな水を飲むことができなかったりと水について問題が起きていることを知った。

私は、これからの水の使い方について宣言する。まず、水を出しっぱなしにしないこと。そして、シャンプーなどの洗剤を使いすぎないこと。簡単なことでも確かな一歩だと思う。徹底して気をつけていきたい。日本中、世界中の人たちが一歩を踏み出せば水の問題だって解決することができるかもしれない。大事なのは自分が水の大切さを実感し、状況を変えようと小さな努力をすることだ。私も地道に努力していきたい。そして、祖母にも胸をはれるようにしたい。将来は周りにも呼びかけられるような大人を目指そう。

入選

“水”について考えたこと

普段の生活の中であって当たり前の水。水道普及率九十七%の日本ではこれまであまり意識してこなかったが、母や祖母は“渴水”を経験している。そういえば、私も豊稔池の放水に田植の季節を感じるし、香川県民は夏場の早明浦ダムの貯水率に敏感である。

さて、水は我々の生活に欠かせないものである。第一、人間は水なしでは五日も生きていけない。飲み水や生活用水としてだけではなく、川のせせらぎにリラックスしたり、滝や海を見れば心が落ち着く。入浴や温泉の効果もある。以前に行った岐阜県の郡上八幡では、街中に流れる美しい用水路の水、それを汚さず使う人々の知恵に清流の文化を感じた。橋から川に飛び込む元気な男の子もいれば、用水路でスイカを冷やしたり、野菜を洗うおばさん、鯉や川魚を大切にしておじさんもいて、皆水と共に生活していた。人の体の半分以上は水でできているし、母親の胎内にいた時にも水に守られていたはずだ。

一方で、今年の台風十一号では、水は人々を震え上がらせる大きな脅威となった。水というのは、その効果となる部分もひつくるめて“自然そのもの”なのである。

では私達は、“自然そのもの”の水を“蛇口をひねれば簡単に出てくるもの”と大いに勘ちがいでしまってきたのではないだろうか。

地球上で生産される食糧が、地球上に住む人々を毎日満腹にさせられるだけの量があるにもかかわらず、飲食で食糧を余らせてしまう国と、足りずに飢餓に苦しむ国とがある。同様に地球上の水資源もとても不公平で、豊かな水資源に恵まれている国と、そうでない国とがある。砂漠など地理的条件もあれば、その国の政治的事情によりおこる水不足は、事態はより深刻である。私は、地球上で何が起きているのか調べてみた。例えば、アフリカの難民キャンプでの生活は、水の確保は食糧の確保と並びとても重要である。UNHCRの資料によれば、難民一人につき最低一日十五ℓの支給を目標にしているそうだ。これは、水洗トイレ

香川県 高松市立屋島中学校 二年 山田 杏

の洗浄二回分程度である。たった二回分。この量を確保するのに困難を極めるとは・・・。スーダン難民が二十万人以上避難しているアフリカのチャド東部は、サハラ砂漠の周辺部に位置し、「世界で最も乾いた土地のひとつ」といわれ、水の確保の為、新しいキャンプ用地を求めざるを得ないらしい。また同じく、十年以上も過酷な避難生活を強いられてきたソマリアでは、せつかくの給水施設が内戦により破壊され、全人口の七十五%が安全な飲料水を口にできないそうだ。加えて二〇一一年この地域を深刻な干ばつが襲い人々を更なる困難におとし入れたという。今、この瞬間にも水不足で声も出ない人がいるのが現実だった。

この事態に、UNHCRや様々な団体が国境を越えて支援を続けている。中でも目を引いたのが、『水のプロフェッショナル』のオックスファムという国際協力団体であり、単に水を届けるのではなく、水技師や衛生の専門家が衛生教育も行っていることだった。汚染された水によって感染した病気で毎年二万五千人以上の人々が命を落としている。難民の中から衛生指導員を訓練し、病気のまん延を防ぎ健康な生活に貢献している。

地球上にはこんなにも不公平や不幸がある。今、私は水の重要性を知り、自分達がいかに安心で安全な暮らしをしているか実感した。そして多くの人が水の危機に立ち向かっていることも知った。今はまだ学ぶことができず、募金に協力するくらいしかできない私だが、感謝の心は忘れずに持っていよう。日々節水を心がけ、いざという時の備えもしよう。そして、“水がない事態”を常に想像できる人になろう。水は“限りある”資源だが、私たちの未来への貢献は“限りない”ものなのだ。

入選

「水を想う」

香川県 香川大学教育学部附属高松中学校 三年 白川 哲郎

昨年の夏休み、家族で旅行に出発する前日大荷物を抱えて母が買い物から帰ってきた。

驚いた。

二リットル入りの水のペットボトルを、何と八本も買い込んでいたからである。普段、水を買うことなどほとんど無い我が家で、八本ものは大変な量だ。

「インド行くから持っていくよ。」
と、母は玄関から部屋に運びながら言った。

そう、僕達家族の旅行先はインドだった。それにしてもなぜこんなに大量の水を持って行かなければならないのか。今までの旅行でも一度も水なんか持って行ったことはなかったし、インドでも現地の店で買えばいいではないかと思った。それに、こんな重いペットボトルをスーツケースに全部入れて行くと言う。何とも格好悪いじゃないかと思った僕は、この状況を打開しようと母への説得を試みたが、無理だった。

旅行者はインドでの水がお腹に合わず、体調を崩す人が多いということとを、実際にインドに出張や旅行で行った友達から聞いたり、インターネットの口コミを読んだりして、母は多角的に情報を得ていたらしい。だから家族五人で必要な水を買ってきたのだと言った。大人は大丈夫でも子どもの体調悪化は大変だし、実際に僕には七歳下の弟がいるので、安心な水がいいと納得した。

そのような状況で、結局二リットルを四本ずつ、二つのスーツケースに分けて入れた。行きから相当ヘビーなスーツケースになった。転がして押しても途中でよろっとするほどだった。荷物検査で中を見られたらとんでもなく恥ずかしいなあとは思っていたが、一度も開けられることなく、八本の水は無事にインドに到着した。

移動中の飲み水として、食事中の飲み物として、また歯みがきの水として八本の水は大活躍し、五人のうち誰一人としてお腹をこわすことな

く旅を楽しむことができた。歴史上の偉大な建造物や町を行き交う色鮮やかな人々の衣服、勢いのある人々の暮らし、どれをとっても大変素晴らしいインドの力を感じることができた旅となった。

ペットボトルを持って行ったことが旅の充実感の元か、と尋ねられたら絶対にそうだとは言いが切れないが、慣れない土地での水は、やはり安心な水であってほしい。入国してすぐは夜で両替もできていなくて、自動販売機も無い所でどうしたら良かったか。そうなることやハリスーツケースを転がしながら持つて行って正解だったと言えると思う。

ここで思ったのは、やはり水の貴重さである。いつも水を大切になんて当然のように考えてはいるが、蛇口から出る水道の水、これは本当に素晴らしいことで有り難いことだと実感した。安心して飲める水が、日本では水道の蛇口をひねれば出てくるのだ。

外国から初めて日本に旅行に来る人々は、おそらくこの安全な水道に驚くに違いない。この日本の水道の設備と技術と、もちろん先人達の水に対する工夫の歴史は日本にとつての財産だと思ふ。

二〇二〇年、東京オリンピックが開かれる。外国から多くの観光客が日本にやってくると思われる。その時に、自然や歴史的建造物はもちろんのこと、日本中どこでも安心して飲める水道の素晴らしさを知ってもらえたら、日本のことを体の中から好きになってもらえる一つのきっかけになるかも知れない。

六年後、もつと安全で安心な水であるために、今、僕達は森のダムに着目すべきだと考える。山々の木々を大切にしていかなければいけない。木々の育つ環境、つまり土壌や空気もきれいにしていかなければならない。水に助けられている人間だけれども、これからは水を思う人間でありたい。

森のダムが作り出す魅力あるエネルギー、日本だけでなく世界に伝えられるよう、水を思う人間として日々生活して行くことと思う。

入選

水の町に住んで

僕の住んでいる松山市高井町は水の町として知られています。僕は昔から杖ノ淵公園でよく遊んでいました。きれいな水の池にたくさんのコイがいるので、えさをやるのが好きです。わき水も豊富で、水がきれいなどころでしか育たない「ていれぎ」という水草も育てられるめずらしい場所です。

小学生の頃、この杖ノ淵公園について調べ、学習を行いました。自分の住んでいる地域だったこともあり、とても興味をもって取り組みました。とくに、「杖ノ淵」という少し不思議な名前の由来については、なるほど納得できる由来が分かりました。

平安時代、日照り続きで水不足だったとき、高井の町を訪れた空海（弘法大師）が、遠くまで飲み水をくみに行ってくれたおばあさんの優しさに感動しました。感謝した空海は、水に困っている村人たちを救うために、地面に杖をついたそうです。すると、その場所からわき水が出てきて、きれいな泉ができました。村人たちは幸せな笑顔と生活を手に入れ、空海と水への感謝を忘れることなく生活したそうです。これが「水の町」といわれる高井町の空海伝説です。この空海の伝説がもととなり、僕が遊んだ公園は杖ノ淵公園と名づけられました。この水で育つていれぎの様子には、伝説民よりの伊予節の中にも、「高井の里のていれぎや」と歌われています。

父と母が大学生だった二十年ほど前、松山市で水不足が深刻になり、地域の水を貯めている石手川ダムの水がなくなってしまうたそうです。そのときは、時間によって水道の水をストップさせて使用量を制限するなど、松山市民は大変な苦勞で、地域全体がパニック寸前だったそうです。しかし、そんな中でも水の豊かな高井では水が出続けたため、大きく注目され、杖ノ淵公園のわき水のコーナーには毎日水をくみに来る人の行列ができていたそうです。

愛媛県 松山市立久米中学校 一年 土居 奏太

父は、『当たり前』の反対は『ありがとう』だから、身の回りの当たり前に見えるものに『ありがとう』の感謝を忘れないようにしなさい。』とよく言います。水不足の国と比べて雨がよく降る日本では、水は「当たり前にあるもの」と思われているかもしれない。しかし、水は伝説や民よくなるほど、「ありがたいもの」です。それに、いろいろな技術が進み、なにも不自由することはないと思われている現代社会においても、きれいな水が貴重であることは変わりません。人々が安心して飲めて、農業や工業でも安心して使うことができる水は、時代をこえて、場所の違いに関係なく、「ありがたい」ものだと思います。汚したり、むだづかいしたりするのは簡単ですが、水がなくなってしまうからでは取り返しがつかないのです。だから僕は、「水があるのは当たり前」だと思っと思っています。

世界には、平安時代の高井の村人のように、遠くに行かないと水が手に入らない人や、父や母の若い時代の松山市民のように水不足が原因でパニック寸前になっている人もたくさんいます。平安時代には弘法大師が杖をついてくれましたが、実際には、そんなことができるわけではないのです。僕たちは、自分たちの力で「杖」をつくれないのです。水があるのが当たり前だと勘違いしないために、水について関心をもって水のことをよく知り、また、水のむだづかいをなくすために、こまめに水道のじや口を閉め、再利用を心がける、そんな小さなことが、本当の意味での「空海の杖」になるのだと思います。

僕は、他の国からお金を出して買わなくても水を手に入れることができる国の、その中でもとくに水がきれいで豊富な町に住んでいます。だからこそ、僕たちは水のありがたさを忘れず、自分で杖をついて、幸せな笑顔と生活を大切にしていこうと思います。

入選

友情の水

熊本県 天草市立御所浦中学校 一年 福部 夢人

ぼくは、御所浦町の水について考え、そして、学んだことを書きたいと思います。

御所浦町は、離島のため、水道とはちがい一九七六年までは、井戸水・湧き水・山水などを生活水、農業用水として使っていました。しかし、その何十年の間には、湧き水などにあり、とても町民の人々は苦しんでいたそうです。一九七〇年代は、御所浦町は、甘夏みかんの生産で日本一にもなった町で、みかんにとっては、無くてはならない「水」なのです。湧水になると、畑や田んぼ、みかん畑など土が硬くなってしまい、葉も元気がなく、みかんも、大きくならないそうです。そもそも、ぼくは、御所浦町は井戸水や湧き水などがあるということも知りませんでした。とてもおどろきました。ぼくの家では、山から水道ホースを引き、みかんの消費や生活水などに使っていたと聞きました。

ぼくは、お父さんにたずねました。

「湧き水っておいしいの？」

お父さんは言いました。

「昔は、水道水より山から引いた湧き水のほうが冷たくておいしかったよ。」

と、言われました。水道水は「カルキ」が多くて、最初は飲めなかったと言いました。でも、山水や湧き水などは場所によっては、雨がたくさん降ると水がにごって飲めないし、お風呂にも入ることができなかったと言っていました。ぼくは、毎日お風呂に入れるし、おいしい水を飲めるので、少しほっとしました。

それでは、いったい、いつから御所浦町は、そして、ぼくたちの家ではきれいな水が水道のじゃ口から出てくるようになったのだろうと不思議に思いました。そこで、ぼくは御所浦の水について、もっとくわしく知りたいと思い、家族のみんなに聞き、やっと分かりました。

まず、御所浦の水はどこからやってくるのだらうと思いました。そして、ぼくのおじさんに聞きました。すると、おじさんが教えてくれました。

た。

「御所浦の水は、水俣の大崎鼻公園という所から御所浦の江の口におくられてくるよ。」

と、言いました。それを聞いてぼくはびっくりしました。
(あんなに遠い所から水はやってくるんだな)

と思いました。ぼくは、おじさんにもっとくわしく教えてと頼みました。すると、おじさんは、

「水俣の水は距離にして、十二・八キロメートル、水俣二十メートルから五十メートルの海底を大きいパイプの中を通して、御所浦町まで水が来ている。」

と、教えてくれました。

「じゃあ、いつごろから、水俣から水が来ているの？」

と、ぼくがたずねました。

「水俣の水が御所浦に来たのは、一九七七年十月ごろ、それは、御所浦町民全体がまちにまった日、そして、家族みんながとても、喜んだ一日だった。」

と、言っていました。

ぼくにとって、「水」とは、水道のじゃ口をひねれば、簡単にでてくるものとは思っていませんでした。しかし、この御所浦の「水」は、多くの人のおかげで、今、ぼくたちがおいしく簡単に飲める「水」があるのだと考えました。数十年前までは、湧き水で苦しんでいた御所浦町民のために、水俣の人々のおかげで安全で、そしておいしい「水」が使えるようになったんだと知ることができました。ぼくの家の近くに水俣の水「感謝の碑」という石碑があります。それには、「友情の水」と書かれています。それを見たぼくは、少し心が温かくなりました。遠くからおくられてくる「水」、そして、水俣と御所浦の「友情の水」。ぼくは、水に感謝し、そして「水」を大切に使いたいと思いました。

入選

循環する水のためにできること 熊本県

学校法人尚綱学園尚綱中学校 三年 鈴谷 美紀

「おしっこを蒸留・殺菌して飲み水に変えているのです。」

私はこの事実に衝撃を受けましたが、これは私が小学五年生の時に聞いた、宇宙飛行士山崎直子さんの講演会での言葉です。国際宇宙ステーションでは水をリサイクルしていて、一人一日三リットルでまかなっているそうです。私たちが普段使う水の量が三百リットルだとすると、百分の一です。ほとんどが食事の準備に使われるとの事でした。そして「宇宙船での水のリサイクルは、ミニチュアの地球を作っているようなものだ。」と話されていました。汚した水の行き先も地球規模で考えると、ついつい人ごとのように考えてしまいがちですが、宇宙船のようにそれがすぐ自分に還ってくるとなると、少しでも水を汚さないようにしようと考えるのではないかと思いました。

私の住んでいる熊本は地下水に恵まれ、水道水のほぼ百パーセントは地下水でまかなわれています。これは阿蘇山に降った雨が、ゆっくり年月をかけて、伏流水となって地上に湧き出てきたものです。二年前に熊本は「国連『生命の水』最優秀賞」を受賞しました。地下水を守るために、枠を超えた多くの人々の活動や様々な取り組みが評価されました。水田を活かしたたん水事業や、水源涵養林の保全、また企業や市民の取り組みなど、多くの人が自分の力でできることで協力してきました。「蛇口からミネラルウォーター」と言われるくらい、新鮮でおいしい水をふだんの生活に使っています。豊かな水に恵まれてきたので、それがあたり前の感覚になってしまい、水に感謝する気持ちが薄れがちになる時もあります。

今まで水に恵まれた環境にあり、海外の水不足は日本では考えられないものと思っていました。しかし仮想水というところさえだと、日本は大量の水を輸入していることを知りました。農産物や工業製品を作るには膨大な水が必要とします。輸入に頼っている日本は、その生産に必要な海外の水を消費していることになるのです。小麦粉一キロだと二トンの

水、牛肉一キロだとなんと二〇トンの水を輸入していることになります。ハンバーガー一個食べるだけで、約一トンの水を消費するのです。ドラム缶五本分です。食料自給率の低い日本が食料を輸入できなくなり、それを自国で作るとなると、たちまち水不足になります。日本の仮想水量は世界最大とも言われています。足りているどころか、海外の水に助けられていたのです。

二〇五〇年には人口が九〇億人になると言われ、ますます水不足が深刻になっていきます。また現在、世界では七億五千万の人が安全な水を利用できておらず、年間五〇万人以上の幼い子どもが不衛生な水で命を落としているそうです。世界的な規模で水の循環やリサイクルを考えていかななくてはなりません。

熊本も長い歴史から見れば、湧水量が各地で減少するなど、確実に地下水の量が減ってきていて、最近では地下水の質も問題になっています。硝酸性窒素による地下水汚染です。原因は、農地で用いられる肥料、家畜の糞尿生活排水だと言われており、きれいな地下水を守るために、水や環境を汚さない「リサイクル意識」がより求められています。

水を作りだしたり、ろ過したり、先進技術も大切です。一方で、一人一人がまず自分の行動がどれだけ環境に負担をかけているか、水を汚しているかを知り、その上で節水し、水を汚さない工夫をしていくことが大切だと考えます。

自然を守ることで、豊かな恩恵にも恵まれます。自然の水循環を大切に守り、世界の水問題を自分のこととして考えられる人でありたいと思います。

入選

水の力

大分県 南端中学校 二年 吉本 伊央利

僕は、国東半島宇佐地域世界農業遺産中学生サミットに、発表者として参加しました。発表に向けて、僕はしいたけの栽培について学びました。すると、水としいたけの栽培は深く関係しているということが分かりました。

国東半島は、九州の北東部にあり、瀬戸内海の南部に突き出した丸い半島です。中央部の山から放射状に延びた尾根と深い谷があり、短く急勾配の河川が多くある地形です。そして、平野部はとても狭いという特徴があります。降水量も少なく雨水が浸透しやすい火山性の土壌であるため、この地域は、昔から水の確保が困難な土地でした。そこで、江戸時代から、ため池が作られ始めました。狭い土地に、大きなため池は作れないので、小さなため池を水路でつなぎ、水を確保していました。機械を使わずに大きな穴を掘って池を作るのは、きっと大変なことだったと思います。

現在でも、そのため池が農業に使われています。ため池には、落ち葉など有機物が溶け込み、栄養が豊富です。この水は主に稲作や、豊表に使われる七島蘭の栽培に使われます。また、ため池のおかげで、水辺環境が安定し、オオサンショウウオやイワギリソウなど貴重な動植物が多く生息しています。

原木を使ったしいたけの栽培のために、クヌギが多く植えられたのは明治時代のことです。クヌギの原木は、約三年間しいたけの栽培に使われ、その後は微生物に分解されて土に戻ります。火山性の土壌では水をためておくことはできません。しかし、こうした木や落ち葉が積もると、養分になるだけではなく、保水力が生まれます。

僕は、実際にしいたけのほだ場へ見学に行きました。歩いてみると、落ち葉の積もった地面は、足跡が付きそうなほど、ほこほこしていて柔らかかったです。そこには二メートルほど石のない土の層があり、落

ち葉などが積もっています。十分な保水力のある山では、しいたけのために水をまく装置を作る必要がありません。落ち葉が積もり、水を蓄えて、その上でしいたけが育つということを農家の方から聞き、僕は自然を上手く使っていることに驚きました。

ほだ場に入ると、気持ちがすっきりするような木の良い匂いがしました。森の中に立つと、自然を守らなければならないという気持ちが湧いてきます。自然と一緒に生きている自分を感じました。

近年、雨が、短い時間にたくさん降ることが頻繁にあります。そのため、大きな水害が起きています。

しいたけ農家の方から、山の上の方を切り開いて、発電のためのソーラーパネルを設置されるという計画を聞きました。保水力のなくなった山の上の方から、下に向かって水が流れ、被害が出るのではないかと心配していました。それを聞いて、僕は山の保水力は町を守っているんだなと思いました。水害を防ぐ方法のひとつとして、砂防ダムがあります。砂防ダムとは、水を貯めないダムです。土石流で大きな石が流れると、被害がとてつもないです。そこで、砂防ダムが流れてきた石をせき止め、土砂を貯めて、水を真っ直ぐに安全に下流に流します。

ソーラーパネルは環境にとってもいい発電の方法ですが、そのせいで他の自然を破壊したり、災害を起こしたりしては意味がありません。水は、しいたけを育て、僕たちにたくさんの恵みを与えてくれます。しかし、少しバランスが崩れると、僕たちに大きな被害が出てしまいます。

僕は発表のために農業と水について調べましたが、それだけでも、飲み水だけではなく、たくさんの「水」があるということが分かりました。「水」と一緒に生きていくには、まずは身近な水のことから、知らなければいけないのでしょうか。

入選

過去から学ぶ水資源

鹿児島県 鹿児島修学館中学校 二年 田代 紗彩

小学生の頃、福岡のドーム球場へ野球観戦へ出掛けた。大きな球場の施設に驚き、野球のルールすらよく分からない私は、ゲームを楽しむというよりも、観客席の応援や勝利の花火を楽しんでいた。

ドーム球場のトイレに入って、普段見かけないマークと「処理水を使用しています。」の表示を目にし、気になった私は母にたずねた。「昔、水不足だったことがあり、その経験から水もリサイクルして使っているんだよ。」と教えてもらった。

福岡市では、過去に三度大洪水が起こり、昭和五十三年と平成六年の二度、大規模な給水制限が行われ、父母は経験した。

なかでも昭和五十三年の水不足は十ヶ月に及び、最も酷かったときは、夕方から夜にかけての数時間しか水が出ないこともあったそうだ。給水車にはバケツを持った人々が列を作り、飲食店ではメニュー制限や使い捨ての紙コップや紙皿で代用したそうだ。トイレは汲み置きの水をバケツで流した。断水していた水道管から出る水は、サビを含んだ赤茶色の水で、蛇口にタオルを巻いて凌いだそうだ。主な原因は、小雨や大きな河川が無いことがあげられる。

中心部の天神からほんの少し離れると、大小のため池が数多く存在し、実際に車で走行していると、カーナビには池の表示がたくさん出てくるのだ。ため池は瀬戸内地方に多く見られると学習したが、福岡は九州一多く、五七二〇箇所もあるそうだ。農業用水不足を補う、先人の知恵と経験による水がめとしての役割があったのだろう。

それらから、福岡市は節水都市を推進してきた。例として、ダム建設、海水淡水化、そして中心部の大きなビルや官公庁、商業施設は、トイレや散水に、上水ではなく、下水を再処理した再生処理水や貯めた雨水を再利用する等だ。また、一日一人当たりの平均水道使用量が、他の大都市に比べて約五〇リットル（バケツ五杯分程）も少ないことから、市

民の節水意識の高さが伺える。

私自身、水に不自由した事はないが、水の大切さを身を以て痛感している両親は、節水が自然に身につけている。まずお風呂では浴槽一杯にお湯を張らない、シャワーを流しっぱなしにしない、残り湯を洗濯はもちろん、散水や火山灰を流すのにも有効利用している。トイレでは節水型便器はもちろん、大小レバーをきちんと使い分けている。食器を洗う前に使用済図書カード等を利用してかきとり、油污れは布切れや紙きれ等で拭きとってから洗う、などが習慣づいている。

昨年ホームステイしたマレーシアでは、空港のトイレの蛇口には「この水は飲めません」という表示があり、地元の人も飲料水はすべてミネラルウォーターだった。シャワーや歯磨きをする時も、水道水を口に含まないよう気を付けた。また、トイレットペーパーも水に流せない所が多かった。

短い滞在だったが、家に帰ってきてごくごく飲んだ水。鹿児島で生まれ育った私には、ここ鹿児島の水が一番おいしいと思えたのだ。水道水で洗った生野菜のサラダをバリバリと食べ、湯船にゆつたりとつかりながら、しみじみと日本は安心安全な水道水が飲める、世界でも数少ない国なのだと再認識した。

ただ、いつまでもその恵を享受しているだけではない。近年では水道管老朽化による事故も問題となっている。最新の世界水フォーラムによれば、約八億人分の水が不足しており、十年後には世界中の三分の二が水不足になるといわれる。安心安全な水を将来につなげるために、私たちは「水」は「資源」であるという意識を持って、できることから、水を大切に使うべき。

入選

守り続ける水

沖縄県 宮古島市立北中学校 三年 大濱 愛里

七月の終わり。もう真夏のような太陽の下、島のあちこちでさとうきびの夏植えが始まる。収穫の日に向けて、一本一本豊作の願いを込めて植え付ける。家族や親せきみんなで行うこの作業は、島の夏の風物詩だ。昨年、父の畑の手伝いで、このさとうきびの夏植えをした。さとうきびを刈り、さらに斧で短く切る苗取りや、苗取りしたものを一本一本みぞに並べていく植え付け作業など、暑い中本当に大変だった。やつと来た休憩時間。喉が渴き、水を勢いよく飲み干した。体中にしみわたり、大きなため息をつく。こんなにも水がおいしいと感じたのは、初めてだった。たった一杯の水を飲んだだけで、「次の作業も頑張ろう。」と気力が湧いてくるのを感じた。水の力の大きさにあらためて気付かされた体験だった。

さとうきびを育てるには、たくさん水が必要だ。雨が降らない日が続けば、スプリングラーや、トラックでタンクの水を運んでかん水する。雨が降った後には、生き生きとして、驚くほど早く生長する。その姿に、水の存在が農業になくてはならないものだと考えさせられる。

現在では、沖縄県内の四割の生産量を誇る宮古島のさとうきび産業だが、地下水が農業用水として利用されるまでは、天候に左右され生産量も安定していなかったそうだ。干ばつの被害に苦しめられることも多かったが、地下ダムや、ファームポンドと呼ばれる貯水タンクの整備により、さとうきびだけでなく葉たばこや野菜など、色々な作物の栽培で豊かな島となった。水と農業のつながりの深さについて考えさせられた。豊かな畑の広がるこの島の風景は長年、島の人々が願ってきた風景なのだ。そしてそれは、こうした水による支え、そしてそれを守る人々の力によってあるものなのだ。そう考えてみると、目の前に広がる当たり前の景色が、大切な島の宝のように思えてならない。

この景色を、水を守るために、私にはどんなことができるだろうか。

まず一番に言えることは、環境を汚さないということだ。地下水は島の人々にとって大切なものであるということはもちろんだが、環境が汚れると水も汚れてしまう。例えば、使った油をそのまま流して捨てると、それは地表に染みこんで地下水も汚染されてしまうということだ。私たちの生活が、そのまま地下水に影響し、また私たちに戻ってくるということに気付いていない人も多い。また、島を支えている農業に使う化学肥料も、地下水汚染の要因の一つとなっている。その改善策として、環境に優しいといわれる有機肥料を開発・利用したり、木を植えて畑からの余分な養分を吸収するといった活動も行われている。環境を守ることが、水を守ることにつながり、私たちの命を守ることにもつながっているのだ。

昨年の八月、宮古島の農業用水の施設を見学する貴重な機会があった。その時目にしたのは、宮古島と伊良部島をつなぐ、今年二月に開通したばかりの伊良部大橋。その下を通って、地下ダムの農業用水を伊良部島まで届けるという計画が進んでいるそうだ。島や人をつなぐだけでなく、水もつなぎ、より良い暮らしをするために活用されていることが素晴らしいと思う。私たちの生活を支えている水は、様々な人の技術や知恵によって生かされているのだと実感した。私たちの見えない所で、水を守るために数多くの努力がある。昔よりも水に恵まれた現代だからこそ、一滴も無駄にしないよう心がけなければならないと思う。一人一人の意識を変えていくことで、水は守られ、命は守られる。

今年もまた、夏植えの季節がやって来る。さとうきびを生き生きと生長させる水。私に力を与えてくれる水。どちらもかけがえのない命の水だ。それを私は守り続けたい。

水 ³⁷ 全日本中学生 の作文コンクール



水について
考えよう!

第29回水とのふれあいフォトコンテスト グランプリ 国土交通大臣賞
「神田川 湧水を美しく(テラの活躍)」白岡 定市

8月1日は「水の日」、8月1日～7日は「水の週間」です。

水は自然の中で永遠に循環を繰り返します。私たちが「水を使う」ということはこの循環の過程で一時的に利用し再び循環の中へ戻していることとなります。水は料理やトイレなど普段の生活のほか、農業や工業、発電など、いろいろな場面で使われています。水を利用するための施設で働く人たち、使った水をきれいにしてまた自然へ返すための仕事をしている人たちがいます。普段、私たちに潤いをもたらしてくれる水も、洪水や漏水などの自然災害を引き起こすこともあります。また、国によってはきれいな水を使えない人たちがいます。この機会に、皆さんが暮らしの中で体験している水にまつわる話や、祖父母、両親、先生から学び聞いた話、自分で調べたことなどをもとに、水についての考えや今後の水の使い方についてまとめてみましょう。

募 集 案 内

🏠 メインテーマ

水について考える(個別の題名は自由)

🏠 原稿(記載要領)

- ①400字詰原稿用紙4枚以内、日本語で記入された個人作品
- ②本文の前(原稿用紙枠内)に題名、学校名(ふりがな)、学年、氏名(ふりがな)を明記して下さい。

🏠 応募締切日

(国内)
各都道府県の水資源担当部局に
お問い合わせ下さい。
(海外)平成27年5月22日(金)

🏠 表彰(予定)

- 内閣総理大臣賞(最優秀賞)……………1名
 - 厚生労働大臣賞(優秀賞)……………1名
 - 農林水産大臣賞(優秀賞)……………1名
 - 経済産業大臣賞(優秀賞)……………1名
 - 国土交通大臣賞(優秀賞)……………1名
 - 環境大臣賞(優秀賞)……………1名
 - 水の週間実行委員会会長賞(優秀賞)……………1名
 - (独)水資源機構理事長賞(優秀賞)……………1名
 - 全日本中学校長会会長賞(優秀賞)……………1名
 - 全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞(優秀賞)……………必要に応じて
 - 入選……………約30名
 - 佳作……………約100名
- 最優秀賞及び優秀賞の受賞者を7月末から8月初旬に行う予定の「水の日」の行事に招待し、賞状等を授与します。

🏠 提出先(問い合わせ先)

(国内)各都道府県の水資源担当部局
(海外日本人学校)国土交通省水管理・国土保全局水資源部水資源政策課
〒100-8918東京都千代田区麹町2丁目1番地3号1a03-5253-8386(直通)

詳しくは、「水の日」「水の週間」についての国土交通省ホームページ(<http://www.mlit.go.jp/>)をご覧ください。

🏠 入賞発表

平成27年7月中旬

🏠 主催

水循環政策本部、国土交通省、都道府県

🏠 後援(予定)

文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構、全日本中学校長会

水の日

第37回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

- 1 応募要領
- ① テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
 - ② 対象・・・中学生（平成27年度に中学校に在学中の者、または、これらの者と同じ学齢の者を含む）
 - ③ 原稿枚数・・・400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
 - ④ あて先・・・中学校等の所在する都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する者にあつては、国土交通省水管理・国土保全局水資源部
 - ⑤ 応募期間・・・平成27年6月12日（金）までに国土交通省水管理・国土保全局水資源部あて到着分有効
 - ⑥ 著作権等・・・○応募作品は自作の未発表のものに限る
○応募作品の使用権は、主催者に帰属する
○応募作品の返却は行わない

2 審査 応募作品16,432編のうち、各都道府県の地方審査を経た178編及び海外日本人学校より送付された51編について国土交通省水資源部による内部審査を行い、中央審査会の対象となる58編を選出。平成27年7月9日に開催された中央審査会において、最優秀賞1編、優秀賞9編及び入選27編あわせて37編の入賞作文を決定。

3 表彰 (1) 賞および賞品

賞		賞品
最優秀賞	内閣総理大臣賞	賞状、副賞
優秀賞	厚生労働大臣賞	賞状、副賞
	農林水産大臣賞	
	経済産業大臣賞	
	国土交通大臣賞	
	環境大臣賞	
	水の週間実行委員会会長賞 独立行政法人水資源機構理事長賞 全日本中学校長会会長賞 全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞	
入選		賞状、副賞

(2) 表彰式 最優秀賞及び優秀賞の受賞者を平成27年8月1日（土）に国連大学ウ・タント国際会議場にて開催された「水を考えるつどい」において表彰

4 中央審査委員 (50音順、敬称略)

- 秋本 佳則（内閣官房水循環政策本部事務局審議官）（国土交通省大臣官房審議官）
- 飯野 博史（全日本中学校長会編集部部长）
- 上村 寿一（独立行政法人水資源機構理事）
- 塩屋 俊一（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（農林水産省水資源課長）
- 須磨 佳津江（フリーアナウンサー）
- 玉野井 晃（公益社団法人日本水道協会調査部長）
- 津村 晃（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（経済産業省産業施設課長）
- 長崎 宏子（スポーツコンサルタント）
- 二村 英介（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（環境省水環境課長）
- 宮崎 正信（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（厚生労働省水道課長）

5 主催者等 主催：水循環政策本部、国土交通省、都道府県
後援：文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構、全日本中学校長会

第37回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿

都道府県名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
1 北海道	平野 とか友加	まぐち 菊地 ひろと光深	やまだ 山田 あみ愛美	—	—
2 青森県	さかき 柳 しょう吾	はんざい 家 繁 すすか 鈴香	すずき 鈴木 ひろな寛奈	なかもり 中森 みさ美沙	おの 小野 あやな綾奈
3 岩手県	あさか 浅沼 こう子香子	くまが い 熊谷 あゆみ歩実	○ さとう 佐藤 のん暢	まえかわ 前川 しずか静香	おの 吉田 さくら桜
4 宮城県	ふかだ 深田 あゆむ歩	あらい 荒井 けんと研人	すずき 鈴木 ゆづな侑那	さとう 佐藤 ゆま結菜	○ わたなべ 渡邊 ちなみ
5 秋田県	さくらば 櫻庭 かの 瑠伽	—	—	—	—
6 山形県	—	—	—	—	—
7 福島県	◎ えんどう 遠藤 りょうすけ亮佑	○ かとうの 上遠野 みゆき幸	◎ すずき 鈴木 やすもと康源	◎ やぎま 柳沼 ゆり優吏	—
8 茨城県	いしがわ 伊坂 みお光織	かとう 加藤 すずか涼芳	ほその 細野 だいら大地	—	—
9 栃木県	◎ いしかわ 石川 みさ未彩	たかの 高橋 みるみ瑞希	ひぐち 樋口 あやな文菜	おがわ 小川 ほたか高	あおやま 青山 ことみ琴未
10 群馬県	こやま 小山 あやほ絢帆	わだ 和田 ありすありす	しが 志賀 はるかか	ほしの 星野 すみれ純伶	よこさか 横坂 ほのか穂乃香
11 埼玉県	◎ みやた 宮田 ほのか帆乃香	ながしま 長島 ちほる千春	よしのがわ 吉野川 めい芽生	やまぐち 山口 なつな夏果	たかはし 高橋 なおき直幹
12 千葉県	さくらい 櫻井 せいや晴哉	○ かとう 加藤 さき咲希	なかやま 中山 ことり小都里	たかはし 高橋 せいな星名	いけの 池野 けい圭
13 東京都	ばんない 坂内 あやか絢香	にしむら 西村 まある真歩	おおたき 大滝 のの かの野乃花	たかぎ 高木 みな美菜	のたぎ 野田 あやの彩乃
14 神奈川県	○ みづら 三浦 あおみ碧美	あさの 浅野 まゆこ真結子	たからだ 宝田 あずさ純沙	おの 小野 るな留奈	よこやま 横山 りん莉音
15 新潟県	きたがわ 北川 ひろか	まつざき 松崎 こころ心	しおの 塩野 あみ亜美	いわさ 岩佐 まり麻里	ほんぼ 本保 はなこ菜子
16 富山県	○ はやし 林 えり	おおやま 大山 りお瑠桜	—	—	—
17 石川県	—	みなべ 三邊 ゆきな幸奈	よしだ 吉田 こうき光輝	—	—
18 福井県	—	—	—	—	—
19 山梨県	○ おいだら 小平 しゆり守莉	かがみ 加々美 けいと佳斗	まぐち 菊池 けいすけ圭祐	◎ こばやし 小林 れいか礼佳	なかじま 中島 ななみ七海
20 長野県	むらまつ 村松 あやか彩夏	ながせ 永瀬 かおる芳	—	—	—
21 岐阜県	わたなべ 渡邊 いり唯里	はやし 林 ちあき千秋	かわぐち 河口 ゆい衣	くわはら 桑原 れな怜奈	はなだ 花田 あいり愛梨
22 静岡県	○ いいだ 飯田 ゆうた祐大	たかぎ 高木 ゆきな有希奈	○ おおつ 大津 あやか亜矢香	いしかわ 石川 ゆい唯	かわかみ 川上 なつほ夏歩
23 愛知県	○ しらがわ 仲川 はるひ晴斐	しばの 柴田 あかね明錦	○ みながわ 皆川 じゅんや純哉	○ く の久野 みゆ美裕	わたなべ 渡邊 かほ海人
24 三重県	しろやま 城山 ひるみ久留美	てらお 寺尾 ひな日那	たいごくや 大黒屋 さくら	うちやま 内山 はる香	おくだ 岡田 あい藍
25 滋賀県	○ うの 宇野 ひかり	まぐち 菊地 ゆうき悠希	つかもと 塚本 なな菜々子	—	—
26 京都府	いのうえ 井上 まい舞	○ よした 吉田 あきひと明仁	よこやま 横山 ねね寧々	—	—
27 大阪府	こやなぎ 小柳 みこと美古都	○ うえた うえだ もも加萌加	なか 仲 みゆ美祐	○ つくだ 佃 ちあひ知采	なかむら 中村 ももこ桃子
28 兵庫県	○ しのはら 氏原 にいな新菜	まぐち 菊井 さき咲希	やまくち 山口 ひより日和	ひろしげ 廣重 みのり	なかはら 中原 あやか綾香
29 奈良県	おかく 岡本 めい芽依	なかぐ 中窪 ゆか佳	なかすじ 中筋 ほなみ穂奈実	おぐら 小倉 ゆうみ	こはし 小橋 れな礼奈
30 和歌山県	かめおか 亀岡 りょうた諒大	つぼた 坪田 はるな遥奈	なかに 中谷 あみ友	—	—
31 鳥取県	—	—	—	—	—
32 島根県	かきた 柿田 みゆ美友	—	—	—	—
33 岡山県	—	—	—	—	—
34 広島県	○ くぼた 窪田 かりん果琳	いのうえ 井上 ゆうき雄貴	おくだ 岡田 れおん怜恩	—	—
35 山口県	○ のうみ 能美 ちえ愛	はらだ 原田 ひろ大翔	ふじた 藤田 ちひろ千紘	—	—
36 徳島県	◎ ひろせ 廣瀬 もも萌瑚	◎ いむら 井村 はなこ華子	おしか 吉岡 たまき珠貴	おかしま 岡島 りゅうじ龍司	◎ やまね 山根 あやか綾華
37 香川県	○ やまだ 山田 あんず杏	○ しらかわ 白川 てるお哲郎	いしはら 石原 しゅういちろう崇一郎	—	—
38 愛媛県	やまぐち 山口 ゆう優雨	○ とうい 土井 そら太	やの 矢野 あみ	☆ あまの 天野 かなこ加奈子	いのうえ 井上 あき亜紀
39 高知県	ははまだ 濱田 そうた蒼大	—	—	—	—
40 福岡県	はしもと 橋本 りこ理来	なぎお 椰尾 みどり翠	すみ 角 ゆうき優希	いなどみ 稲富 かのん奏音	いまづ 今津 りお里美
41 佐賀県	よとみ 吉富 ゆか由華	なかお 中尾 さやか紗也花	おぐま 小熊 みさと美智	ういけ 鵜池 しんや真也	しらい 白岩 たもん多聞
42 長崎県	やまだ 山田 りあ瑠璃愛	さいごく 西極 ほのか	さの 佐野 こうき航紀	きはら 木原 かなう叶羽	おだ 小田 たかよし啓由
43 熊本県	たどころ 田所 あまね	○ ふく 福部 ゆめと夢人	○ すずたに 鈴谷 みき美紀	なかにし 中西 りん凜	うらはま 浦浜 あゆ綾香
44 大分県	おかく 岡本 ふみな文奈	—	—	—	—
45 宮崎県	いままら 今村 りょうこ涼瑚	○ はしもと 吉本 いおり伊央利	うえき 植木 つぐあき嗣享	—	—
46 鹿児島県	さくら 菊池 ちな智菜	かい 甲斐 あい愛果	ながたに 長谷 はるな春菜	さしま 佐島 そう壮	あおい 青井 はるな晴奈
47 沖縄県	たなる 田代 さあや紗彩	なかしま 中島 こうたろう功太郎	すえどめ 末留 そうま壮真	ふくどめ 福留 れい子舞子	さくぐち 迫口 ゆう優
48 海外	—	まえどまり 前泊 かずき和希	○ おおはま 大濱 あいり愛里	—	—

(注)氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、☆は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選、その他は佳作。

第37回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

都道府県名	地方審査 優秀者数 (編)	応募学校数	応募総数 (編)			
			1年	2年	3年	
北海道	3	7	100	21	37	42
青森県	5	5	43	10	17	16
岩手県	5	4	34	7	13	14
宮城県	5	3	73	71	0	2
秋田県	1	1	1	0	1	0
山形県	0	0	0	0	0	0
福島県	4	21	323	35	161	127
茨城県	3	8	472	148	236	88
栃木県	5	4	349	114	124	111
群馬県	5	9	457	23	272	162
埼玉県	5	7	262	88	66	108
千葉県	5	6	472	223	4	245
東京都	6	5	85	74	3	8
神奈川県	5	13	911	346	263	302
新潟県	7	8	55	9	27	19
富山県	3	6	851	320	442	89
石川県	0	0	0	0	0	0
福井県	0	0	0	0	0	0
山梨県	5	2	5	0	4	1
長野県	2	1	2	0	1	1
岐阜県	7	4	109	0	102	7
静岡県	5	7	368	105	89	174
愛知県	5	8	231	124	52	55
三重県	5	5	668	265	261	142
滋賀県	3	5	528	183	266	79
京都府	3	3	550	206	176	168
大阪府	5	7	782	398	241	143
兵庫県	5	7	962	104	333	525
奈良県	5	6	215	35	137	43
和歌山県	3	13	790	250	493	47
鳥取県	0	0	0	0	0	0
島根県	1	1	1	0	1	0
岡山県	0	0	0	0	0	0
広島県	3	5	90	58	1	31
山口県	3	4	21	5	14	2
徳島県	5	5	56	13	11	32
香川県	3	15	73	30	42	1
愛媛県	5	23	832	120	437	275
高知県	1	2	3	0	2	1
福岡県	5	9	709	85	367	257
佐賀県	5	21	326	183	114	29
長崎県	5	7	501	67	232	202
熊本県	6	32	3,477	1,172	1,659	646
大分県	3	5	49	40	9	0
宮崎県	5	8	153	106	45	2
鹿児島県	5	8	289	111	124	54
沖縄県	3	22	103	28	50	25
海外	51	3	51	20	20	5
合計	229	345	16,432	5,197	6,949	4,280

※海外：学年不明6名

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

		応募 学校数 (校)	応募 総数 (編)	性別		学年別		
				男	女	1年	2年	3年
				(編)	(編)	(編)	(編)	(編)
第1回	昭和54年	634	4,875	1,878	2,997	1,513	1,710	1,652
第2回	昭和55年	486	3,930	1,446	2,484	1,245	1,462	1,223
第3回	昭和56年	487	5,569	2,159	3,410	2,004	1,974	1,591
第4回	昭和57年	512	5,111	1,878	3,233	1,923	1,848	1,340
第5回	昭和58年	495	4,192	1,435	2,757	1,925	1,214	1,053
第6回	昭和59年	531	7,013	2,905	4,108	2,923	2,115	1,975
第7回	昭和60年	572	9,703	3,676	6,027	3,794	3,647	2,262
第8回	昭和61年	507	7,431	3,080	4,351	2,809	2,680	1,942
第9回	昭和62年	513	9,253	3,789	5,464	4,086	2,935	2,232
第10回	昭和63年	498	10,119	4,233	5,886	4,212	3,501	2,406
第11回	平成元年度	641	13,192	5,601	7,591	5,345	4,392	3,455
第12回	平成2年度	551	11,782	5,320	6,462	5,404	3,549	2,829
第13回	平成3年度	623	12,056	4,834	7,222	5,174	3,821	3,061
第14回	平成4年度	552	12,718	5,332	7,386	4,898	4,533	3,287
第15回	平成5年度	473	13,680	5,340	8,340	4,658	5,024	3,998
第16回	平成6年度	557	13,647	5,591	8,056	5,247	4,577	3,823
第17回	平成7年度	558	15,918	6,617	9,301	5,940	5,388	4,590
第18回	平成8年度	491	15,479	6,595	8,884	5,403	5,606	4,470
第19回	平成9年度	456	13,688	5,731	7,957	5,088	4,792	3,808
第20回	平成10年度	493	13,764	5,935	7,829	4,842	4,609	4,313
第21回	平成11年度	429	11,903	4,971	6,932	4,324	4,059	3,520
第22回	平成12年度	413	14,283	6,288	7,995	4,737	4,968	4,578
第23回	平成13年度	362	11,841	5,131	6,710	3,862	3,844	4,135
第24回	平成14年度	413	13,442	6,159	7,283	4,878	4,691	3,873
第25回	平成15年度	453	13,385	5,980	7,405	4,100	4,618	4,667
第26回	平成16年度	452	16,488			5,595	5,655	5,238
第27回	平成17年度	439	15,726			4,489	6,464	4,773
第28回	平成18年度	373	16,038			5,157	5,811	5,070
第29回	平成19年度	385	16,173			5,242	5,697	5,234
第30回	平成20年度	339	14,927			4,516	5,118	5,293
第31回	平成21年度	344	16,462			4,929	6,038	5,495
第32回	平成22年度	378	16,941			5,592	5,925	5,423
第33回	平成23年度	365	19,618			6,930	6,635	6,052
第34回	平成24年度	368	16,826			4,542	6,692	5,591
第35回	平成25年度	368	18,191			5,564	6,602	5,924
第36回	平成26年度	331	19,419			6,555	7,406	5,365
第37回	平成27年度	345	16,432			5,197	6,949	4,280
合計		17,187	471,215			164,642	166,549	139,821

- (注) ・第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
 ・第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
 (教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮)
 ・第35回においては学年未記入者101名を、第36回においては学年未記入者93名、
 第37回においては学年未記入者6名を学年別集計から除いている。

第37回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

全国からの応募作品16,432編の中から選ばれた最優秀賞1編と優秀賞9編の受賞者の表彰式は、平成27年8月1日（土）に東京都渋谷区の国連大学ウ・タント国際会議場において開催された、「水の日」を記念する政府主催行事「水を考えるつどい」内で実施されました。



最優秀作文の朗読
愛媛県 松山市立椿中学校3年 天野 加奈子さん（内閣総理大臣賞受賞者）



作文コンクール受賞者と各賞授与者



国土交通省

Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

国土交通省水管理・国土保全局水資源部

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3

電話 (03) 5253-8111 (代表)

ホームページ

<http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html>